

それは狂わせた。

針島

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ならず者どもは大変なものを壊していきました。という話。
八話完結。感想返信なし。

目次

隱者の賢石	1
秘密の部屋	12
牢獄の囚人	21
狂炎の魔杯	34
服従の死兵	53
煉獄の人形	64
致死の呪病	74
安寧の至宝	86

隠者の賢石

わたしはハリー・ポッターが嫌いだ。何故なら憎い男の息子だから。母を壊した男の息子なんて視界にも入れたくない。きつとあらはそんなことなんて知るはずもないんだらう。逆恨みなんだってことくらいも分かってる。

でも、だからって、わたしが許すと思うか。母を壊した男の息子に慈悲なんてかけると思うか。母の人生を奪ったのだ。その罪は息子が償え。母の代わりにこのわたしが制裁してやろう。

「シャノン、シャノン！ どー！」

ああ、呼んでいる。憎い母が呼んでいる。すぐに向かって磔の呪文。気が済むまでなぶられて、意識が飛びかけたところで服従の呪文。はい喜んで、お母様。何をさせていただきましようかわが主。ヒステリックで傲慢で高慢ちきな母上様。人形娘はいつだってお付き合いますよ。

引き裂く。焼ける。汚物にまみれ、ぐちゃぐちゃに揉まれてはい完成。十数年前の『シャノン・ソーウエル』の出来上がり。誰も助けてなんてくれない惨めな惨めなスリザリンの穢れた血。ケラケラ笑う。笑うしかない。そこにいるのはもう自分でないと彼女は分かっているから。

ひとしきり気が済めばはいおしまい。転がる汚物に興味がなくなった女は明るい地上へと戻って行って、わたしはここで飼育殺し。繰り返され続けたお陰で『スコージファイ』も『エバネスコ』も無言で繰り出せる。もちろん『エピスキー』も。そうでなければどうの昔に死んでいる。

きつと父親とかいう存在はわたしのことなど知るよしもない。ここに『魔女シャノン・ソーウエル』という存在は全て埋め立てられている。気晴らしのための人形娘。知り得ることは本当に少ない痴呆娘。

やれることは母がここに埋葬した書物を読み漁るだけ。死ねジエームズ・ポッター。シリウス・ブラック。ピーター・ペティグ

リユーにリーマス・ルーピン。その四人とついでにリリー・エバンズは地獄に落ちろ。母の受け売りだが。

ああ同志よ。同じ地獄を味わい、うまく抜け出した母の同志よ。穢れ過ぎている母を救ってはくれなかった同志よ。それであなたは報われたのか。もしそうでないのなら、闇の帝王も地獄に落ちてしまえ。

投げ入れられるパンがまたカビている。異様な緑色でもふもふもしている。柔らかい。頻度も落ちている。死ねというか、母上様。構わない。死ぬための手段はいつでもあなたの手の中に。そら、振るってみるがいい。いつもの引き裂く呪文をどこにでも、好きなように。

さあ目を閉じて。終わりの時を――

「止める！ 止めるんだ、ミス・ソーウエル！」

何だ。止めるのか、やたらごっこつした人間。あれが男とかいう存在か。わたしは母のために生きていた、人形だ。ならばいつ殺しても構わないはずではないか。何故止めるのだ。まさかお前が父親とかいう存在なのか。

じ、と目を向けてやる。緑色の閃光が――自分の胸に杖を向けた母に、炸裂した。慌てる男は強引に目を閉じさせてきたがもう遅い。この目にしかと焼き付いた。あれはもう、助からない。何ということだ、なんて呟きながら母を横たえる男はひどく疲れて見えた。

悪いがここからは動かない。ぴくりとも動く気力はないし、生きる意味も今奪われた。ならばこのまま母と同じように、緑色の閃光で終わりにしなくては。わたしは母のための生き人形。ならば、それに相応しく終わらねばなるまい。

「なっ……」

何故か声が聞こえたが、もう遅い。このまま手を振るって――
目が覚めた。

嫌な夢だ。過去の夢。いつまで経っても纏わりついてくる、本当のこと。憎しみからは逃れられず、真実が奈辺にあらうとも変えられないこと。あの日わたしは『人形娘シャノン・ソーウエル』ではなくなつた。そして、全く知らない人間に引き取られた。

結局あの男は父親ではなかった。貴族の屋敷の使用人だったらしい。母のことはずっと気になっていて、それでやっと行方を探し出したらしい。それにかけて時間が約十年というのだから執念がおかしい。変態か。変態なんだろう。

引き取られた先でわたしには名が与えられた。出生届すら出されていなくせに魔法が使えるものだから、魔法省からせつつかれていたらしい。シェイラ・スワン。それがわたしの新しい名前らしい。シャノンではないシェイラ。ソーウエルでないスワン。それがわたしだそう。

正直に言つて、実感が湧かない。『That's You』とか言われても信じられない。何故ならそう育つてはいないから。スワンというのもあの男の姓であつて、父親のものですらないらしい。尚更実感が湧かない。

それでも馴染まねばやっていけない。右も左も、言語すら怪しい状態でわたしは男の勤め先たる屋敷に仕えることになった。といつても屋敷で本格的に働くためには勉強しなくてはならないことが多く、また一年もしないうちに学校へと通わされることを考えれば実質詰め込み教育を施される日々であつたというほうが正しい。

「スワン！ 姿勢が悪い！」

「言葉遣いを使用人らしくしなさい！」

「何でもかんでもエバネスコで誤魔化さないの！」

彼らにとつて穢れた血たるわたしなど教育する価値などないはずなのだが、同い年の令嬢のために色々仕込まれた。使用人のスワン。お嬢様の友人に相応しい女となるべく仕込まれる人形。何も変わらない。されることが変わるだけ。ならばわたしに順応出来ないはずもない。

一年。それだけの時間でゴミクズのようなだったシャノン・ソーウエルはいなくなつて、貴族令嬢に仕える使用人シェイラ・スワンの出来上がり。さようならシャノン。こんにちはシェイラ。全てはパーキンソンの令嬢のために。

ああお嬢様。わたしの全てはあなたのためにある。単純明快。馬

鹿の極み。あれほどまでに尽くしていたのにこんなに簡単に忠誠のありかはすり変わる。鏡を見なければもう母の顔なんて思い出せない。

「準備が整いました、お嬢様」

「ええ、行きましよう」

ホグワーツ特急に乗ってがたりごとり。百味ビーンズなるゲテモノのゲテモノ味だけ選び取る。お嬢様の口に合うわけのないそれは、味覚を失って久しいわたしに与えられる。ええ、美味しいですお嬢様。口の中からエバネスコ。

「よく躡けられた犬みたいでしょう？」

自慢げに話すお嬢様。お嬢様のためなら火の中水の中。クスクス笑う大柄なご友人はわたしの芸を楽しんでくださっている。種も仕掛けもありますが、どうぞ楽しんでいってくださいいな、わんわん。こちらには普通のサンドイッチもご用意しております。

おや、お気に召しませんかミス。趣味が悪い、ですか。ではすぐに片付けますね。え、違うのですか。どういうことですか。クスクス笑う。何がおかしいのか分からないけれどわたしも曖昧に笑みを浮かべる。笑顔爛漫。花満開。

笑いの花が咲いている。そんなところに無粋な声が。

「ネビルの蛙を見なかった？」

何だこの女は。無粋で無礼でお嬢様に相応しくない。せめてコンパートメントの扉くらいは叩いて欲しい。この蛙ならどうぞ、私物ですがと手から蛙チョコレートを投げつけてやれば、縮れ毛の女は悲鳴を上げて逃げていった。ざまあみろ。

「便利な番犬ね」

「恐縮です」

浮かない顔の美人な友人がそう評してくれた。サンドイッチはお気に召さなくてもこういうのはお気に召すらしい。得意げな顔のお嬢様が誉めてくれる。何よりのご褒美。わたしはお嬢様の忠実な番犬です、わんわん。

しばらくして今度は丁重に迎えねばならない少年がやってきた。

魔法界の王族が実質いなくなった今、一番力を持つ貴族。プラチナブルンドのドラコ・マルフォイ。お嬢様の想い人。彼はハリー・ポッターがいかに愚かであったかをひとしきり語って去っていった。

同意、同意。完全に同意。何故なら母の心はあの畜生どもに完全に壊されて、スリザリンどころかホグワーツの中でさえ最底辺の存在にされてしまった。何をしてもいい存在。いじめても、何をしても構わない穢れた血。それを作り出したのはあの畜生どもだ。その息子が愚かでないわけがない。

お嬢様の顔を立てるために何も言わなかったけれど、本当ならそれを大声でわめき散らしたい気分だった。ハリー・ポッターは愚かな父と母を持った愚かな少年だ。同級生をいじめ壊すような男の息子がそうならないだなんて保証はどこにもない。

列車を降りて、運ぶべき荷物がなくて。おろおろしてしまったらお前さんも生徒だろう、と言われてやっと思い出した。そういえばわたしも従者としてでなく生徒として入学したのであった。さもありません。ボートに乗って、大広間の前で待機して。組分け帽子なる汚い帽子が歌って。

そうして組分けが始まった。大柄な友人ブルストロードがスリザリン。あの浮かない美人のグリーングラスもスリザリン。いけ好かない縮れ毛グレンジャーがグリフィンドール。マルフォイはスリザリン、お嬢様もスリザリンで、ポッターはグリフィンドール。さて次だ。

「スワン・シエイラー！」

厳格そうな老婆が読み上げた名前。嘘だらけのわたしの名前。汚い帽子をつまみ上げ、頭に乗せてさあ脅迫。スリザリンにしなさいな。でないとかんで燃やして汚物まみれにしてあげる。

『おお怖い……しかし、それで良いのかね？ 君ならばレイブンクローでもグリフィンドールでもやっていけるだろうに』

うるさいボロ雑巾め。わたしの存在意義はお嬢様にしかない。スリザリンでなければわたしの存在意義は果たせない。グリフィンドール？ ポッターを殺して良いならグリフィンドールでも。レイ

ブンクロー？ マーリンの髭でもむしっていなさい。学びはわたしを救わない。

『やれやれ……スリザリン！』

歓声など湧かない。こんなみすぼらしい使用人が祝福などされるはずもない。当然のことのように椅子が用意されるが、座るはずもない。わたしは使用人。使用人は使用人らしく弁えている。生徒でもあるらしいがこの場で優先されるべきは当然お嬢様だ。

「座らんのかね、ミス」

「わたしはお嬢様の使用人です、ゴースト様。使用人が座る必要が？」
血みどろなゴーストに諭されても座るつもりはない。もちろん寮監に睨まれてもだ。しかしお嬢様は違ったようで、焦ったようにわたしを座らせた。組分けが終わっても食事が始まってわたしは給仕すらさせてもらえない。何のためにわたしはここに来たのか。お嬢様のためだろうに。

食事はしておけとお嬢様に命じられたので生命維持に必要なだけ食べて、あとはぼうつとしていた。わたしの存在意義は？ どうしてここに？ 何のために？ ぐるぐるぐるぐる思考が回る。

謎の校歌を聞き終えて、寮に案内されて。荷物が置かれたその部屋に、もちろんお嬢様はいらした。他にもグリーングラス様とブルストロード様がいらして、わたしはこのお三方のお世話のためにここにいるのだと存在意義を新たにする。

「片付けておいて」

「かしこまりました、お嬢様」

命令がわたしを突き動かす。移動で疲れていても、何があってもわたしがやるべきことは決まっている。自分のことなどかなぐり捨ててお三方の荷物を片付けて。時間割りを見ながら明日の用意を済ませて軽く眠る。

目が覚めたらスコージファイ。ゴミが見えたらエバナスコ。いつもと同じルーティンを、いつもと違う場所でも繰り返す。授業の準備は完璧だ。スリザリン最頂の寮監スネイプ教授の魔法薬学の授業へさあ出陣。

蓋を開けてみれば何のこともない。ポッターが蔑まれ、スリザリンが尊ばれてウスノロが失敗しただけ。調合も二鍋分完璧に終わらせた。わたしとお嬢様の分。それからブルストロード様とグリーン格拉斯様の分だ。

だと、いうのに。

「……スワン、残りたまえ」

居残りを命じられてしまった。クスクス笑うグリフィンドール。ああ、ゲラゲラ笑う赤毛とポッターが憎い。笑うならば完璧に調合したまえ、グリフィンドール五点減点！などと教授が言わなければどうなっていたかすら分からない。出来るだけ早く戻るとお嬢様に誓って、わたしは教授とお話をする事になってしまった。

ねつとりと絡み付くような声で教授は問う。

「君はどこで魔法薬学を学んだのだね」

もちろんすぐには答えられなかった。いつどこでこの知識を得たのか思い出せなかったからだ。考え込むこと数分、ようやく思い出す。そうだ、あの地下室のノートだ。地下室のことは広言してはならぬと言い含められていたので多少言い方は考えたが。

「……ふむ、あの独特の方法……色こそ違えどその瞳。お前はソーウエルの娘か」

目をぱちぱち。教授がそう断じる理由が分からぬ。この教授が一体母の何を知っているのか。いや、もしや彼は見た目どおりの年齢でなくもつと若いのか。母と在籍期間が近かったのかも知れない。

「先生は、母を……存じていらっしやるのですね」

「……余計なお節介がそっくりだ。他人の調合には二度と手を出さな、困るのは当人ですからな」

苦々しく絞り出したような言葉に驚いて、母という存在がまた分からなくなった。他人にお節介を焼ける程余裕のある人間には見えなかったのだが。いや、違う。彼はまさか、このねつとり蝙蝠はまさか、彼なのではあるまいか。名前は焼き切れてしまって覚えていないけれど。

ならば従わねばなるまい。母の願いはあのならず者どもに復讐す

ることで、この同志を守ることなのだから。セブルス・スネイプ。心に刻もうその名前。その意思を。母上様、人形娘はいつだってお付き合いますよ。

いつしか日々は過ぎていつて、スリザリンの道化師と呼ばれるようになって。わたしはお嬢様方の顔を立てながら着実に点数を稼いでいた。お嬢様方が失った点数はわたしが全て挽回していた。そんなことをしていたら縮れ毛から敵視されるようになっていたが、どうでも良いことだ。

ハロウインにトロールだとか、四階の廊下に三頭犬だとか、与太話が蔓延っていたがわたしは知っている。当然だ、お嬢様に危険が及ぶのならそれを排除するのが使用人の勤め。どちらも笑えるぐらい真実で、未だにその危険物は排除出来てはいない。

そんなことをしていたら何故か今度はポッターに睨まれた。帝王殺しの英雄様。ならず者どもの息子。そして二代目ならず者どもの身内の赤毛にも。何故だ。あの三頭犬を排除するのがそんなに悪いことか。危険は排除せねばならないだろうに。

ポッターに睨まれたということはグリフィンドールから睨まれたということ。二代目ならず者どもが目を付けて、非常に衛生的でない悪戯が始まった。仮にも女にすることではない。ゲラゲラ笑うグリフィンドール。そこにレイブンクローも混ざっていて、パーキンソンが怖くないスリザリンも混ざっている。

スコージファイ、スコージファイ。エバネスコ、エバネスコ。未だにエピスキーを使っていないあたりは生ぬるい攻撃しかされていない。面白がる周囲も次第に興味を失ったように消えていく。わたしが泣かないからだろう。叫ばないからだろう。助けてと言わないからだろう。ただ淡々と痕跡を消し去るから、面白味を感じなくなっていくだけ。

ある日には老婆に呼び出された。

「ミス・スワン。その……」

「なにかご用ですか、先生」

グリフィンドールの寮監として謝罪された。しかしそんなことに

意味はない。何故なら彼らに止めるつもりはないから。マクゴナガルが彼らを止めても抑止力にすらならないから。だから何の意味もないことで、わたしはそれを聞き流した。

休暇に入っても状況が変わるはずもなし。ああいうことに耐性があるらしいと悟ったお嬢様は苛立ちがたまるとわたしで解消するようになった。ああ、何も変わらない。いつまで経っても人形娘。シエイラ・スワンという皮を被ったシャノン・ソーウエルのまま。『That's Me』。

早く解決策を練らなくては。お嬢様が安全に過ごせるようにするには。わたしがホグワーツに通う意味がない。サンドバッグになっけていても学べることは多い。その学びはわたしを救わないけれど。

殺せるほど強いとは思いつかない。けれど殺さなければお嬢様が殺されるかもしれない。二律背反。教授に報告してもあれはあれでよいのだ、などと耳を貸してくれる様子はなし。強くならなくては、強く。

だと、いうのに。次々と厄介事を持ち込む輩というものはもう本当に死んで欲しい。何だあの醜い半巨人は。ならず者どもでも流石に弁えていたはずだ。校内で危険な魔法生物を飼うな。ノルウェー・リッジバグ種のちっちゃなちっちゃなノーバートちゃん。控えめに言って死ぬ。

もちろんすぐに報告した。グリフィンドールは減点されて、スリザリンは加点されて減点された。解せぬ。しかも理由がおかしい。ドラゴンの存在はなかったことにされている。意味不明だ。マルフォイ様が理事に報告する様子もない。そして森番のあの男にはおとがめなしだ。意味不明だ。

ホグワーツが危険すぎる。危機管理がガバガバだ。確かに母の時代もそういうものは働いてはいなかったようだが、これは流石に酷すぎるのではないか。ダンブルドアの目は節穴過ぎるのでは。危険物を持ち込む危険人物を放置してどうするということのだ。

いかにルビウス・ハグリッドが危険であるのか、認識できていない

というのなら。これまでの罪状を並べてやる。過去を掘り返し、退学の事実を掘り起こし。憐れな女生徒が怪物に殺されたことも、その怪物が禁じられた森にまだ生息しているどころかコロニーを作っていることまで。正式に書類にしてダンブルドアに叩きつけてやった。

「ふおっふお、一年生にしてはよく調べてあるのう。それを学業に生かしなさい、ミス・スワン」

するとどうだ。目の前であのファツキン校長は燃やしやがったではないか。グルか、グルなのか。あの憐れなマートル・エリザベス・ウォーレンはダンブルドアとあの醜悪な半巨人に謀殺されたのか。穢れた血であるからという、ただそれだけで！

そうやって、母も見殺しにした。偉大な校長？ 知ったことか。その偉大な校長が救わなかったものは多い。母も、教授も、グリフィンドールに逆らうものは全て救われない運命にある。何がスリザリンの怪物だ。グリフィンドールの怪物ではないか。とんだ風評被害である。

憎悪に身を焦がし、少しずつ使える呪文を増やしていった。学年末試験を終えて、寮杯の獲得の発表があった。そこでもまたわたしはダンブルドアに憎悪を抱くことになった。スリザリンは本当に頑張ったのだ。少しづつ着実に、他者から目をこちらに向けさせる卑怯さも発揮して。スリザリンはトップだった。そう、だった、なのだ。

「よしよし、しかし、最近のことも加算しなくてはのう」

そこから始まる怒涛のグリフィンドール推し。意味不明な露骨なまでの鼻屑と強引な加点にスリザリンは葬式のような雰囲気まで醸し出している。何だ、マクゴナガルのチェスに勝ったから加点とは。見事な推理力に加点とは。勇気に加点とは。その髭もげてしまえ。

ダンブルドアのせいですつかり意気消沈したスリザリンのテーブルはすすり泣くことしか出来ない。今までの頑張りは何だったのか。得意げに蔑むグリフィンドールの何と醜いことか。狡猾なスリザリンと呼ぶ彼らは分かっている。本当に狡猾なのはグリフィンドールではないか。誰も反論も出来ない場での強制加点。

「……寮杯……が、せつかくの、寮杯が……頑張ったのに、こんなのないよ……ないよお……」

泣き崩れる優等生。クイディッチの選手達も愕然として、足を引く張るまいと全力を出していた劣等生達も皆涙を流している。それをグリフィンドールは嘲笑するのだ。悪辣な、本当に悪辣で卑怯で傲慢なグリフィンドールどもが。

卒業生が一番憐れだ。七年連続で寮杯を獲得出来たという栄誉を得られたはずの彼らが。こんな馬鹿げた加点によって侮辱されたのだから。こうして醸成されるのだろう。スリザリンとグリフィンドールの対立は、社会人になっても永劫に続く。

わたしは別に悔しくはない。わたしが頑張ったのはスリザリンのためではなく、お嬢様のためだから。だが、お嬢様を悲しませたのだから相応の報いは受けて貰わねばなるまい。さて、どうしてくれようか。

そんな憤懣やる方なし、といった一年目だった。

秘密の部屋

二年目。今年度も始めからやらかしてくれた。どうやらお騒がせポッターは穏やかな新学年の始まりを迎えさせてはくれないらしい。噂では未成年でありながらも許可なく魔法を使って警告をもらったとか、空飛ぶ車で暴れ柳を破壊したとか散々な言われようである。良いぞもつと言つてやれ。

わたしはというと変わりなくいつでも忠実なお嬢様の犬である。そして、親から何となく事情は聞いたのかスリザリンでの地位は更にランクダウンした。今ではスリザリンの犬だった。はい喜んで、何でも致しますよ皆様方、わんわん。

ついでに闇の魔術に対する防衛術の新しい先生は使えない奴だった。というか母の知り合いだった。母の不名誉を外に出したくなくば従いなさい、はい分かりましたわんわん。こうしてわたしの飼い主は増えていく。

喜んで授業の助手をやり、喜んで嘲笑され、喜んで貶められた。グリフィンドールはゲラゲラ、ゲラゲラ。スリザリンはクスクス、クスクス。勇気ある少年少女が聞いて呆れる。仲間思いの少年少女が聞いて呆れる。集団心理にやられた奇妙な常識に囚われている。こうして人間は狂つていくものらしい。

「もつと面白い芸はないの？ パンジー」

このところまたパグ犬に近付いてしまったお嬢様が、まだまだ使いこなせぬ魔法をかけた。ウインガーダイヤモンド・レヴィオーサ。服だけがふわふわ、引つ張られても抵抗はしない。色気のない下着が晒されてどうぞご覧あれ。何の魅力もない木綿の下着です。わんわん、ゲラゲラ、ご笑覧。

「……悪趣味ね」

ぼつりと呟いて興味なさげに読書に専念するグリーングラス様の様子が嫌に目についた。あれぞ品位あるスリザリン、ゲラゲラ笑う皆様方も見習つてどうぞ。魔法界の重鎮マルフォイですら笑い転げているのにあの落ち着きっぷり。将来大物になりそうだ。

ひとしきり芸が終わって深夜のこと。誰もが寝静まっていたもわたしはまだ眠れない。三人分の筆跡で宿題を終わらせて、鞆の準備を終わらせて。いつもの日課、いつものルーティン。ああそうそう制服にアイロンもかけなくちゃ。

しかし今日は視界の端に美しい瞳が写った。

「……グリーンングラス様、起こしてしまって申し訳ございません」

その新緑と大地と海の混ざりあったような美しい瞳は、見るだけで囚われてしまいそうな妖しきがある。ダフネ・グリーンングラスを美女と呼ばしめるその瞳。そこに浮かぶ感情は見たことのないもので、だからこそ簡単に狼狽える。

「貴女は誰より優秀なのに、パンジーごときのためにそれを無駄にするの？」

——息が止まった。本当に何を言われているのか脳味噌が理解してくれない。早く答えを返さねば失礼だというのに、言葉はどこかに逃げていつてしまっていて答えられない。何故、どうして、どのように。分からないから答えられない。

「……わたし、は」

「次から私の分はやらないこと。自分でやるわ、私から学びを奪わないで頂戴」

「承知致しました」

それになら淀みなく答えられる。命令であれば何だって。質問なんてされたところで答えられるようなものはわたしにはない。いつだってわたしは人形娘なのだから。そこにわたしの意思など関係ないし必要ない。

白く、細く、硝子細工のような指が穢れたわたしの髪に触れる。思わず身を引くと、その手は着いてきて汚い頬を撫でた。触らないで。どうか、触れないで。あなたが穢れてしまうから。

「……あの」

「覚えておきなさい。そして誰にも話さないこと。……貴女の父親は——」

な、ぜ。何故グリーンングラス様がそんなことを。分からない。理解

できない、飲み込めない。けれど別にどうでも構わないことだ。ぞつとするほど美しいこのご令嬢は、わたしが仕えるべき純血の姫君。それ以外の何者でもないはずだ。

だというのに。だと、いうのに——

「二人きりの時は、シエイラ。ダフネと呼びなさい」

「はい……」

答えはYes。それ以外はあり得ない。純血の姫君相手に拒否をすることなど許されてはいないのだから、そうとしか答えられない。だからこそ分らない理解できないどうしてどうしてどうして。どうしてグリーングラス様がそんなことを言うのか。

一睡も出来ず夜が明けて、いつもの通りの日常が始まって。そう思っていたのに今日はハロウィン、死者の帰ってくる日。母は二度と帰ってこない。魂も残さず消え去った。だからこの日に意味はなく、祝いの気持ちを抱く馬鹿どもの脳味噌をカチ割ってやりたくなる。

そういえば、と思う。去年はこの日にトロールが湧いたのだったか。ならば今年はきつと大イカでも暴れだすのではなからうか。至極興味はない。それがお嬢様方を傷付けないのなら。ポッター？好きにしろ。

ほら、ほら、今に来る。すぐに来る。ずるずると這いずり回る——ハロウィン会場からの帰りに。それは、あつた。生きたままま石像にされている猫。嫌われ猫のミセス・ノリス。憐れな憐れな普通の猫が、石にされて脅迫文を盛り立てる。『秘密の部屋は開かれた——継承者の敵よ、気を付けよ』。

秘密の部屋。それは昨年調べたところによると五十年前に開かれて憐れな女生徒を殺したらしい。犯人は判然としている。ルビウス・ハグリッド。先日もドラゴンとかいう危険生物を飼おうとしていた罪人だ。しかし捕まらない疑われない追放されない。あの日ダンブルドアに破り捨てられた紙切れを、もう一度まとめ直して今度は寮監へ出しに行く。

「話を通しておこう。しかし、期待するな。自分の身は自分で守りたまえ——特に、君は」

スリザリンのはぐれものたるこのわたしを憐れんでくれるらしい。忠告はしかと聞き届け、しかし気を付けようもなく日々は過ぎる。隣にはいつでもお嬢様が、ブルストロード様が、グリーングラス様がいる。ここで危険に陥るならば、それは純血に楯突くのと同じこと。だからある意味ここは一番安全なのだと思じて疑わない。

けれどある夜また目が合って、グリーングラス様はおっしゃった。「ミリセントはともかく、貴女は大丈夫よ。純血の誰もが分かっているはずだから。貴女の血はほとんど純血なのだ」と

「左様で……？」

「そう。誰の、かは他の誰に分からなくとも、マグルの、でないことだけは確かだもの。必ず魔女と魔法使いの血を継いでいるのだから、貴女は大丈夫」

落ち着かせるような美しい視線。無条件に信じてしまいそうなほどの安らぐ声。理由は全くわからないし事情も飲み込めないけれど、ダフネが言うのであればわたしには信じられる。他ならぬダフネなら。

それより何より気になるのは『ミリセントはともかく』だ。ミリセント・ブルストロード。お嬢様のお友達のこのお方が一体どうして『ともかく』なのか。紛うことなき純血だろうに。

ダフネ曰く、彼女は本家の血筋ではあるものの、影武者として育てられた方の『ミリセント』だそう。本物の『ミリセント』は既にもうこの世には亡いらしい。影武者『ミリセント』は本家と違いをつけるため、その血に半分マグルが混ざっているそう。つまりは混血、半純血。狙われたっておかしくない、そういうことだ。

ああ、それで得心がいった。無意識かなんだか分からないが、いつだってブルストロード様はダフネとお嬢様に纏わりついている。特に最近。そういうこと、なのだろう。純血認定される自信がないと、そういうこと。

とはいえ世間で継承者とは、スリザリンの誰かだと目されている。マルフォイ、グリーングラス、パーキンソン。ノットにフリント、しかしてクラップとゴイルは除かれた。頭の出来だろう。容疑者なら

けのスリザリン。しかして犯人はここにはいない。その証明こそここにある。スリザリンから排除したいなら、まずはわたしを石にする。

怪しき人間は数多く。とはいえ答えは見つからない。今か今かと尻尾を出すのを待っていて、その間に噂は噂を呼ぶ。継承者はパーセルマウス。継承者はスリザリンの末裔。継承者の秘密の部屋には得体の知れない怪物がいて、その怪物をけしかけて回る快樂殺人(未遂)犯がいる。

被害者続々、死者は出ない。死んだ雄鶏達は食事に並べられ、蜘蛛どもは禁じられた森へと消えていく。日常の些細な異常事態。ぼーっとみやり、ふと気付く。いやいや待て待てその蜘蛛は、と捕獲してみれば。

「……わたしの目が飾りでないのなら、教授。これはアクロマンチュアの幼体では？」

硝子の中で蠢く蜘蛛がキシヤアと教授を威嚇した。

「森の奥にコロニーを作っているという話だったが……ダンブルドアがもみ消した。すぐに駆除させよう……」

頭を押さえたスネイプ教授が率先し、校内から逃げ出して森へ続く蜘蛛どもを成敗し。これを放った当人に始末をさせて一件落着、にはなりはしない。あの石化は明らかにアクロマンチュアによるものではないからだ。そう、あれは犯人にはなり得ないのだ。

気付いて愕然。ならば一体秘密の部屋の怪物は、どのようにして生物の石化を成し遂げたのか。そんな時に響く声。

「ポッターがパーセルマウスらしいぞ！」

やりかねない。何とあのならず者の息子のハリーは心優しきハッフルパフのジャスティンに、蛇をけしかけたそうなのだ。生憎課題が増えてきたのでそれを片付けている間に起こった決闘クラブの顛末がそれ。流石ポッター、話題に事欠かない。

蛇、蛇、石化の蛇。コカトリスか、バジリスクか、あるいはメドウーサなどか。しかしいずれも瞳を見れば死に至る。石化などという生温い状態ではなくそのまま死ぬ。手詰まりか、手詰まりだ。

とはいえ警戒は怠れない。お嬢様を守るためにはいついかなるときでも戦えねば意味がない。決闘、呪文、練習あるのみ。あの治りにくい切り裂く呪文が使えたならば、実に役に立ったろうに。記憶に埋もれたあの呪文はいくら掘り返しても出てこない。

目を見ず獲物を仕留める難しさよ。仮想の敵に何度もやられ、いつしかそれを無意識に追い求める自分がいた。殺せ、殺せ、怪物を殺せ。実に女の発想ではないのだが、生憎わたしは人形娘。殺人人形にでもなってみせましょう。

また学年末がやってきて、今度は何と、純血が拐われた。殺されたでもなく、石化したでもなく、拐われた。生徒の名はジネブラ・ウィーズリー。二代目ならず者どもの妹だ。周囲を騒がせたいだけならば妹を使うな、ならず者。

しかして様子を伺えば、何とロックハートに一任されている。ダンブルドアの支持者を失いたいのかどうなのか。心酔されているウィーズリーの娘は見棄てはられぬはず。ダンブルドアは追放されて、さようなら。

ロックハートに呼び出され、カナリア代わりに使われる。何故だか背後にはポッターと末弟ウィーズリー。どうやら彼らは無謀にも、ジネブラを助けに行くらしい。そして彼らもまたわたしをカナリアに使うらしい。いよいよもって、流石はポッターだ。

「スリザリンのピエロなんか石化したって惜しくないだろ」
「違くない！」

この外道どもめ。開けと空気が通り抜ける音がして、蛇口が開いてこんにちは。ロックハートに突き落とされ、ロックハートに吹き飛ばされた。流石に者間距離は考えろ。背中にこつりと杖が当たり、先に進めと促される。

先に進めば脱け殻がどどんと存在感を露にして。ロックハートが錯乱し、杖を奪ってオブリビエイト。しかしそれは誰にも当たらなかつた。何故ならその杖は末弟ウィーズリーの折れた杖。呪文は逆噴射してロックハートはピュアハートに。さようならフィクシヨン作家ギルデロイ・ロックハート。尊くない犠牲なのでもう忘れた。

天井崩れて分断され、奥の方からずるずる音がする。現れたのは蛇の王。まさかの肉楯として使われて、目は見ないままに呪文を乱射する。オブスキューロ、フリペンド、ステューピファイ。ギリギリで瞳はぐしやりと潰れ、汚い液が漏れだした。

視界が消えたからか、痛みからか暴れるバジリスク。ポッターと二人で逃げ出して、開かれた空間へと飛び出した。横たわるはジネブラ・ウィーズリー。助け起こせど衰弱し、このまま放置すれば死にそう。

そこでゴーストのごとき妖しい少年が呆然と呟いた。

「……ソーウエル？ シャノン・ソーウエルか？」

「そんなはずがないでしょう。母は既に死んでいて、そもそもあなたとは面識はないはず。五十年前の学年首席、ルビウス・ハグリッドを退学に追い込んだ英雄。ミスター・トム・マールヴォロ・リドル。わたしはシェイラ・スワンです」

それを聞いてケタケタ笑う。不気味で不安が溢れ出す。彼は全てを否定した。

「いいや、僕には分かる。君は——君は！——いつまで経っても『シャノン・ソーウエル』だ！」

意味不明で理解不能。当然ながら完全無視だ。まずはいつの間にか消えていた蛇の王から殺そうか。杖を構えて周囲を見て。どこにも影が見当たらない。右も、左も、朽ちた部屋だ。

そこで光の文字が目の前を踊る。トム・マールヴォロ・リドル、が崩れて混ざって溶けてこねくり回されて。そして出来る『僕はヴォルデモート卿だ』。痛々しい青少年期の全能感が名乗らせるその名は皆を震撼せしむる恐怖の名。

しかし何故か、その文字は。死の飛翔を意味するその名前は。ひどく懐かしい響きをもたらした。何かがほどけて転がり落ちる。分かっていったこと、いつかは本当に『人間』にならねばと、そのための鍵が転がり落ちた音がした。

「あ、あ……」

声にならない声が漏れて、若き闇の帝王はサラザール・スリザリン

の継承者としての自らの正当性を明かす。S・S。サラザール・スリザリン。シャノン・ソーウエル。シエイラ・スワン。そして——あの人も。連なる無数のSの群れ。SとSに挟まれて、出来るものは喪服の葬列。

嘲るように裂かれた口は、その真実を吐き出した。

「愚かな君に出来ることなんて、殺すことだけだよ」

事実、真実、それは全て証明されていた。母は死に、心も死んで、今もそう。母が母を殺したからわたしはここにいて、シャノン・ソーウエルを殺したからシエイラ・スワンはここにいる。死の淵ですつとタツプダンス。踏み外せばおしまい、だというのいつまで経っても踏み止まる。まだその時ではないからだ。

そして、ああ、そして——

「ならば証明しましょうか」

力強く、フリペンド。放たれた魔力の矢は過たず蛇の王へと突き刺さり、一撃でその命を奪い去った。流れるようにエクスペリアームス。未来の帝王から杖をもぎ取り背後へ投げる。ジネブラを助けたいなどとは思わない。だけれどここにいるためには、助けなくてはならないのだ。

わたしが生きるためには絶対に、何かを犠牲にしなくてはならないのだ。さようなら蛇の王。わたしが生きる糧となれ。

一方ポッターとヴォルデモートは、お辞儀に決闘、卑怯な手。伝統に拘るといっても彼はゴーストに近いのだ。杖を弾き飛ばしたところですぐに回収するし、どこにでも移動できるからいつだって蛇の王の亡骸を利用できる。

飛んだ毒牙がポッターの腕をかする。毒が回って死にかける。けれども英雄『ハリー・ポッター』をダンブルドアがむぎむぎ殺すわけがなかった。不死鳥がどこからともなく湧いてきて、涙をこぼして元通り。

うっかり闇の帝王はそれを見逃して復活を許した。そうしてわたしは生きるために——

不死鳥はポッターとジネブラを連れ去った。わたしは置き去り、

ウィーズリーの末弟とロックハートは回収した。おのれダンブルドア。久々に嗅ぐ不潔な臭い。スコージファイ、スコージファイ。

やがて入り口へと戻れても、そこはもはや閉じられて。ここは既に袋小路。配管の中を出口求めてさ迷い歩く。憐れなトイレのマートルが配管をぶち抜いて水を溢れさせなければ、同じくトイレのシェイラになっていたことだろう。

臭いよさらば、スコージファイ。談話室に集まるスリザリン達の脇を透明なわたしがするりと抜けて、部屋の中へと倒れ込む。流石にこんなのはこりごりだ。継承者が結局誰なのかは分からなかつたがもう良いだろう。バジリスクは死に絶えて、拐われたジネブラは救いだされた。

めでたしめでたし、そこに人形娘は必要ない。

牢獄の囚人

三年目。夏休みで少し落ち着いた頃に少し背が伸び一応女らしくもなったわけだがお嬢様は一段とパグ犬である。どうやら昔マグル生まれに呪われて、一族にはパグ犬化する呪いがかけられたらしいのだ。

そのマグル生まれの呪うには、どうかあいつから素晴らしい顔を消してくれ。なんて自己中心的な呪い。なんて憐れなお嬢様。純血の姫でもその呪いを解く方法はない。真に姫のことだけを思う王子さまなんていない。姫にはいろんな柵が絡み付いている。

ただし本人にはそうは見えないらしく、化粧したパグ犬顔で満足げに微笑んでいる。うまく化粧は出来たらしい。まったくわたしには分からないけれど。知らぬ顔でお世話が続ければ、ぐいと引つ張られて座らされた。

「あの、お嬢様……？」

「いいから、いいから。座ってなさい」

上機嫌なお嬢様。それならそれで良いことだ。いつでもあなたの人形娘はお側に仕えておりますよ、わんわん。しつこいくらいにスコージファイ。その後何故か化粧され、髪は何故か結い上げられ、最後の仕上げは服だった。

「そ、そんな良い服なんて着せていただくわけには……！」

「黙りなさい。あんたにはこれから仕事があるんだから」

にやにや笑うお嬢様の隣で美しく着飾らされたその女はわたしだった。中身だけが貧相なまま、外面だけが取り繕わされる。そこにいるのはまるで母のようなわたしだった。そして付き添い姿眩ましで飛ばされて、辿り着いた先には見知らぬ男。

激痛、激痛、激痛、激痛。せっかく着飾らせていただいた衣装は台無しで、涙と汗とそれ以外の液体にまみれてぐっちやぐちや。そのままオブスキューロ。そしてインカーセラス。死ぬかと思うほどの激痛と、何とも言えない解放感。激痛を快樂へと変換させないと、気が狂ってしまいそうだ。

「良かったな、あと二十七回じゃなくて」

嘲るように言われた言葉。これが、この気の狂いそうなのが、あと何回だって？　ぞんざいにスコージファイされて、また別のところへ飛ばされて、同じことの繰り返し。痛みと痛みと痛みと痛みとほんの少しの快樂が、まだ成人もしていないわたしの身体を襲う。一度？　二度？　四度？　それとも？　最早回数なんて、覚えちゃいない。

そうやって夏休みの間にわたしはすっかり変わってしまった。疲れ果て、ようやくお嬢様のところへ戻れた時にはもうそこに、元のわたしはいなかった。

ホグワーツ特急でクスクスクスク笑われて。今年の任務を言い渡されて、もののついでのように噂話。どうやら凶悪犯のシリウス・ブラックが、アズカバンから逃げ出したらしい。それはそれは、都合の良い。

組分け、任務、授業の合間。まずは授業。同時に任務。こっそり休憩、そして私情。二足のわらじとどこぞの諺が言うけれど、わたしがはいたのは四足のわらじ。任務と授業。休憩と私情。その四つを並行させて、目が回りそうなほどの毎日を過ごす。

今年度のどつきりびっくり闇の魔術に対する防衛術は、何とリーマス・ルーピン殿のお出ました。そして最初に扱うものといえば、皆のトラウマ決る魔法生物。大人でもうまくあしらえないこともあるという、ボガートなる生き物だった。

重苦しい沈黙の中、一人、一人と恐怖を晒す。両親の怒声ならばまだ可愛いもので、闇の道具がわんさか見れる。中にはのっぺらぼうのような男も多くいて、それが尚更空気を重くした。リディクス、リディクス。誰もが馬鹿馬鹿しいなんて唱えられない。

わたしがその前に立ったとき、不意にゆらりと立ち上がる。同じ顔の女が杖を――

「……っ、リディクス！」

見せられない。見せられるわけがない。見せて良いわけがない。わたしが恐怖しているものは、皆とは少し性質が違うから。闇の帝王が怖い？　闇の魔法の道具が怖い？　否、否、否。わたしが見た恐怖

は、エメラルドグリーンの光を発している。

閃光を泡に変え、それを何とか隠しきった。しかしルーピンは、顔をひきつらせてこちらを見ている。どうやら見てしまったらしい。授業の終わりに部屋へと呼び出され、大きなマグカップにホットチョコレートを用意された。

馬鹿なルーピン。わたしがこれに口をつけると思ったか。

「その……さっきのは」

「先生には何ら関係のないことでしょう。あなたがあの人に何も関係しようとしなかったように」

ならず者どもの日和見主義者。お前が見棄てたもの達は、一体どれ程の苦しみを背負ったか知るが良い。あれらの手綱を握れるからこそ監督生になれたのであって、お前自身の価値がそれに相応しいなどと思うな。

わたしの冷たい言葉を聞いて、ルーピン殿は凍りついた。

「エバネスコ」

わざわざマグカップを傾けてやって、中身を有言呪文で消してやる。お前のことは毛の一筋たりとも信用してなどやるものか。動揺、慚愧、それらの感情が瞳に揺らぐ。知ったことか。苦しみ抜いて、消えるが良い。

言葉を探してどうするのか。お前に言えることなどない。

「さて、用がそれだけならば失礼します。ここに居る時間が惜しいので」

「いや……君は、まさか、ソーウエルの……」

「その名はあなたが気安く呼んで良いものですか？」

無礼になろうが構うものか。わざわざ無言でマグカップを洗ってやって、わたしは部屋から抜け出した。先程のは教師としての話ではないようで、咎めも追い継りもしてこない。どうでも良い。下らぬ感傷で憐れまれても苛立つただけだ。

その日から視線を感じ続ける。鬱陶しいことこの上ない。しかし所詮はただの教師で、寮内にまでは干渉はない。だから彼は気付かない。わたしのはいた、四足のわらじに。彼の友を追い詰め死を与える

ために、どれほどわたしが尽力しているか知らないのだ。

学びと、苦痛と、安らぎを乗り越えて。向かう先は禁じられた森。最近ここから視線を感じ、そして毎度のことながら――

「パウツ―」

こうして黒犬が襲い掛かってくるわけだ。理由は全く分からないが、雑に呪文で攻撃してやる。何となく後が面倒になりそうなので、任務で使う呪文は封印だ。エクスペリアームス、エクスペリアームス。しかし黒犬は意にも介さず執拗に噛みついてくる。

森を探索しながら犬と戯れ周囲をキョロキョロ、どこにいる？ シリウス・ブラック、出ておいで。もちろん出たら殺してやろう。今なら正当防衛成立だ。ダンブルドアなら追放してくるかもしれないが、それならそれで構わない。お嬢様に仕えることは至上命題ではないからだ。

今日も門限。明日も同じ苦しみに満ちた日々が始まるだろう。苦痛と苦痛と苦痛と苦痛。それらからは逃げられない。それはシャノン・ソーウエルの存在意義であるからだ。シエイラ・スワンの皮を被ったシャノン・ソーウエルの。

深夜も苦痛は終わらない。むしろ夜こそ彼らはやりたがる。インカーセラスとオブスキューロ。苦痛を快樂へと変換させて、にやにや、嘲笑、激痛。夜明けの前に力尽きる。それがわたしの日課です。どうぞ皆様お使いください。わたしはスリザリンの下僕です。

くるくるくるり、わらじの魔法。ゆつくり眠れ、明日も同じだ。夜明け前に起きてまたくるり。眠り足りないくるくるり。疲れが取れるまでゆつくり眠ってさあ今日が始まるぞ。

そんな日々が続いたある日、寮監に呼び止められた。

「スワン、来たまえ」

「はい先生」

もちろん従いますとも、わたしはスリザリンの下僕です。とはいえ先生も使うのだろうか、スリザリンの純血様方のように。それはそれで気になるものの、口にして問うのは憚られる。

しかしそれは杞憂のようで、部屋で紅茶を差し出された。

「……お前が寮内でどうなっているのかは知っている。我輩にはそれを追及をする権利は残念ながらない。ないが……本当に、お前はそれで良いのか」

「わたしの意思など尊重されるべきものではないでしょう？」

それは彼にとつては答えだったようで、痛ましげに顔を歪めてきた。別に先生には関係のないことで、それに何を口出しされても意味のないことだから。そんな顔をされても困るだけなのだ。ああ、でも、多分——母はそれを、望まない。

とはいえ今更拒めやしない。未だわたしを使わぬ貴族に庇護を求めようにも無理がある。お嬢様は黙認。ブルストロード様も黙認。マルフォイ様も黙認。黙認、黙認、黙認だらけ。誰が敵で、誰が味方になり得るかなんてもう分かるはずもないのに。

やっと分かった。二十七回じゃなくて良かったな、とは。聖二十八一族のことか。ならばそこから庇護者を探さねば。母を悲しませたくはない。母の望みはわたしの望み。叶えてやらねば生きる意味もなし。

論外なのは、マルフォイ、クラブ、ゴイル。フリント、パーキンソンに、ブルストロード。ノットもきつと、無理だろう。カロー、グリーングラス、一考の余地あり。ウィーズリー、ロングボトム、マクミラン、アボットなど庇護を求めようもなし。

得るものは多くない。だが、失うものは多い。柵などない人形娘のはずなのに、失うものが多すぎる。ハイリスクローリターン。お嬢様を、スワンを、全てを捨てられるか。試されるのは本当にそれだけか。ぐるぐるぐるり、思考も回る。どうしてどうすればどうやって。そんな迷いが表に出たか、ある休日ホグズミードに連れ出された。誰も近づかぬ叫びの屋敷。つまりそれは格好の——

スワン、スワン、あなたがわたしを連れ出したのは。本当にこうするためなのか。虚ろな瞳でクルーシオ。母の痛みよりもまだ軽い。クルーシオ、クルーシオ、クルーシオ。痛みなんてどこにもない。なのにどこか、心が痛い。

まさかのここでも、オブスキューロ、インカーセラス。スワン、あ

なたもなのか。苦痛を与えられているのはこちらなのに、わたし以上に歪む顔。涙と汗とそれ以外のものでぐっちやぐちや。

「シャノン、シャノン——ッ！」

解放。それはどんな時よりも痛く、辛く、苦しく、そして快樂へと変換させやすい。だというのにスワンはそれを変換させずにむせび泣く。いやいやと首を振る。生理的嫌悪によだつ肌。やめて欲しい、そうありたいのはわたしの方だ。

「違う……違う、僕は、こんなことをするために——ッ！」

解放。解放。流れる涙は不思議な程に温かく、するりと胸に落ちてきた。

ああ——そうか、スワン。あなたは、多分、いやきつと。母のことを——

エメラルドグリーン。それは目隠しごしに禍々しく閃いて、わたしを苦しみから解放する。そして、スワンも。余韻が消えぬうちに激痛、解放、激痛、激痛。呼吸を変えて、落ち着かせて。いつものどんな任務より、心が痛む音がする。

術者が死んで、解き放たれた腕をそつと痛みに添える。形は変わってしまったけれど、すぐに元に戻るだろう。わたしはそういうイキモノだから。ゆっくり萎んで、痛みは消えた。生暖かいナマモノはすぐに連れ去られてひとりぼっち。

死んだスワンはもういない。瓶に雫を掬い取り、零れぬようにきつく閉める。そうして屋敷をスコージファイ。臭いまで消して、身嗜みを整えて。これで何もなかったことになる。だから、どうして、流れる涙は瓶に当たって消えていく。

落ち着く頃にはもう門限。重い腰を上げて寮へ戻る。深夜こっそり抜け出して、禁じられた森に瓶を埋葬した。きっと彼は弔われなない。報われない。だから、わたしだけでも——埋めてやる。小さく墓石を作り出し、さらに小さく刻んでやる。『R. I. P.』、続いて悩んで『Simon Swan』。安らかに眠れ、サイモン・スワン。

ベッドに戻って、もう決めた。これを宿命というものあらば、そんなものなど叩き壊してやる。人が死なねば決められぬ。軟弱、懦弱と

自身を罵りそれでももう決めた。こんなことは終わりにしよう。

授業を受けて、くるくるり。オブスキューロとインカーセラス。しかしわたしはそれを受け入れない。しかめっ面にステューピファイ。そして慎重にオブリエイト。まずは一人。さあ次だ。くるりくるくる、繰り返し。

何度も何度も繰り返す。ステューピファイに、オブリエイト。次第に回数は減って行って、残りは一人。さあ終わらせよう、くるくるり。最後の一人も呆気なく、その事実を――

「お前はただそうあれば良かったのね」

嘲るように裂かれた口が、失敗したことを告げてきた。杖は捨てられ、クルーシオ。クルーシオ、インペリオ、クルーシオ、クルーシオ、インペリオ、インペリオ。意思が保てない。ふわふわ幸福、はい喜んで。

目までおかしくなってきた。そこにいるのは一人？ 二人？ 男

？ 女？ 全てが全て壊れていく。痛み、苦しみ、全てを快樂へと変換させて。手が四本、口が二つ。

「ヘスティア、甘やかさない方が良くわよ」

「でも、フローラ。この子を飼うの、楽しくない？」

呼び名で分かった。そうか、この二人は。ひとつ年下のカロ姉妹か。その思考も快樂で消えていく。右でカリカリ、左でペロリ。正常な思考が帰ってこない。登り詰めても戻ってこれない。

好き放題になぶられて、気が済むまで何時間経ったか。二人はクスクス笑って印を刻んだ。これ見よがしに、残酷な笑みを浮かべて。白いみぞおちの上に絡み合う青い蛇。髑髏はない。ゆるりと杖が振られれば、そこに甘い痺れが広がった。

「これは合図よ奴隷娘。こうなったら、すぐにここにいらっしやい」

「遅いとおしおきしちゃうから、あんまり待たせない方が良くもね」クスクス、クスクス。飼い主が変わった。どうすれば良い。この二人から逃げ出すには。部屋に戻って、しばらく経って。わたしのお嬢様はパンジー・パーキンソンでなくヘスティアとフローラ・カローになった。いつになれば逃げ出せるのか、全くもって見通しが立たな

い。
くるりくるくる、繰り返し。逃げ出す術が見つからない。何度も何度もトライ&エラー。捕まる度にどこかが壊れ、逃げ出す気が消えていく。任務はもうない。代わりに双子になぶられる。正気は削られ、心が消える。いつしか時間の感覚さえも消え去った。
二人はどこでも印に火を灯す。授業中でも、深夜でも。朝の寝起きの時間でさえ。授業のためにはもう回さない。双子のためになる。目的は既にすりかわって、いつでもわたしは双子のためになる。

誰もいない地下牢教室で。双子の部屋で。任務の部屋で。八階の廊下の先で。震えるものと、生暖かいものと、熱いものが責め立てて。既にわたしはわたしを認識できなくなっていた。壊れた人形娘はただ双子のためにある。

そうしてある夜。いつものように双子の姉妹に呼び出され、部屋から抜け出そうとしているところを捕まった。腕を掴むのはダフネ。後の二人は眠りこけている。

「……どこにいくつもりなの？」

「……お答え……っ、あ、っ……でき、ま……せ、えっ……んっ……」

刻まれた印は時間が経つとわたしに快樂を落とし込む。すっかり快樂へと変換させてしまったあの苦痛は、時間が経つごとに大きくなる。離して欲しい、切実に。他ならぬダフネにこんな状態のわたしを見られたくは——ないのに。

「インカーセラズ」

「なっ……いやっ」

急な呪文にとっさのフィニートも出ない。口は既に閉じられて、集中できずに解呪も出来ない。もごもご言うのが耳障りなのか、マフリアートにシレンシオ。ベッドに転がされ毛布をかけられ寝ているように偽装されて。そのままダフネは部屋から消えて。そして朝まで帰ってこなかった。

苦痛が、苦痛が、増幅されて。にっちもさっちもいかない状態になって。追い詰められても何も出来ず。わたしは人形娘のはずなの

に、涙がぽろぽろぽろ零れていく。嫌だ、嫌だ、ダフネにだけは。布団はもぞもぞ動いていただろう。音が消されていることに感謝した。

朝になって隣の二人は喜び勇んで出掛けていく。マフリアートが切れたのか、漏れて聞こえる楽しげな声。ホグズミードで乾杯だとか。どうやらイースター休暇だったらしい。そんなことすら気付かずに、わたしはずっと、時間の狭間を生きていた。

部屋に戻ったダフネは言った。

「破れぬ誓いを結ばせたわ。あの二人はもう貴女に何も出来やしない」

「ど、うして……」

零れる言葉。理解が出来ない。どうして、どうして、それしか言葉が見つからない。温かい。どうして、どうして。どうしてその白磁の腕は。月桂樹の瞳は。透き通るような金の髪は。わたしに向けられているのだろうか。

「どうして、ですって？ 友達を助けるのに理由が必要？」

衝撃だった。ダフネはわたしを友と呼ぶ。わたしはダフネを友達と思ったことはないというのに。ダフネは仕えるべき純血で、けれど他とは違って慈愛に満ちている。そのくらいの認識。毛色の違う美しいひとだ。

起き上がるには酷く力が必要だったけど、それでも向き合わなくては失礼だ。

「ダフネ……様」

「良く頑張ったわ。貴女は頑張った。言われた任務はとつくの昔に果たせているの」

強張った。まさか、知られているなんて。知らないはずだと愚かに思い込んでいた。任務は、任務はお嬢様方の誰にも知られたく——いや、知られて当然か。パンジー様は、とても口が軽くていらっしやる。心配げに下げられた柳眉はすぐに寄せられ目蓋がその瞳を隠している。すぐに開いてわたしは壁に追い詰められた。

「ひっ……や、ダフネ……さまあつ……」

みぞおちに杖。触れる杖先が痛みではなく快樂を流し込む。それだけは、それだけは嫌だ。ダフネにだけは、されたくない。ダフネにだけは、して欲しくない。わたしはそのために生まれてきたはずなのに、それだけは果たしたくなかった。

「やめて……嫌、です……っ、ダフネ、さま……」

「……悪辣な子達。ごめんね、シエイラ。もう少しだけ……我慢していて」

口を押さえた。両手は塞がり、目の前は涙で塞がって。刻まれた印が一つずつ、時間をかけて剥がされる。ごめんなさい、ごめんなさい。こんなわたしでごめんなさい。どうか軽蔑してください。

最後までペリっと剥がれたとき、わたしはもう我慢なんて出来なかった。

「来る……ッ、く、るう！」

視界が消えて、意識が飛んで。壁に背を持たせかけたままずるずる滑る。乱れた呼吸を必死に整えて、貪るように冷たすぎる空気を吸って。頭が冷静になってきて、どうしようもなく無理だった。こんなの、こんなの——もう、無理だ。

「あ……あ、っ」

認めてしまえば早かった。母が何故あしたのか良く分かる。心が耐えきれなかったから。ぶるぶるぶるぶる震える寒々しい心では耐えられなかった。だからこうして杖を自身に向けて、震える声で唱えたの。

「アバダ・ケダブラ」

息絶えよ。息絶えよ。けれど意識は消えなくて。手には既に杖がない。凍えるように寒い中、酷く遠くから声がした。

「……っ！ だから、嫌だったのよ……吸魂鬼なんて！ エクスペクト・パトローナム、エクスペクト・パトローナム！ どうか……どうか照らして、私の心を、シエイラの心を！」

ゆるりと温かい空気が揺らいで滑り込んでくる。白銀の美しいもやがわたしを包み込む。それと同時に柔らかい身体も。ガチガチ震える身体を抱き締めて、ダフネは窓から湖の上を睨み付けた。誰も助

けに来てくれない。

だけど、その代わり白銀の鹿が駆け付けた。ダフネとわたしの隣に降りたって、窓の外を駆け巡る。少し空気が軽くなり、ようやくそこで気付けたこと。どうやら正常な思考が出来なかったらしい。

ゆっくり、凍えるような寒さが消えて。ついでに熱も消えて、冷静に。

「……あの」

「何も話さなくて良いわ。私が話すから」

そしてダフネは言った。カロー姉妹はもうわたしに手を出さない。その代償はダフネが支払って、それで全てがもう手打ち。どうしてそんなことを、と問うことすらダフネは許してくれなかった。

白魚のような指がわたしのそれに絡まって、ダフネは最後にぽつりと呟いた。

「……ごめんね、シエイラ。私じゃ、こうしないと貴女を助けられなかった。根回しにこんな時間に時間がかかるなんて……思いもしなかったの」

「そんなの……そんなの、わたし、でも、ダフネ、さま……わたしは、どうすればそれに報いることが出来るのですか？」

「……っ、そんなこと……いいえ、貴女はそういう子だものね。なら、少しだけ手伝って頂戴」

喜んで、ダフネ。わたしはあなたのためならば、どんなことでも――

「ちなみにやって欲しいのはネズミの捕獲よ、ウィーブリーの」

「……え？」

「ちよつと悪趣味すぎるあの子達のニーズに応えられそうなのがそれしかなかったのよ。私だってあんまり乗り気じゃないわ。でも、破れないんだもの、仕方ないわね」

そこからわたしとダフネはネズミと猫を捕まえた。末弟のウィーブリーのペットと、それと仲の良いグレンジャーのオレンジ色の猫だ。それを合わせてカロー姉妹に献上し、それで誓いは果たされた。

「見ない方が良いわよ」

頭を押さえてダフネは言った。けれどもわたしは目を離せない。ヘステイアとフローラが嬉々として、呪文をかけてネズミを猫に、猫をネズミにしようとした。ネズミは猫にはならなかったので、猫をネズミにしたのだが――

「いえ、でも、あの……だ、グリーンングラス様。何かネズミがネズミじゃなくなったのですが」

「……へ？」

ダフネが振り向く。そこにいたのは禿げ上がった小太りの中年男。フラツシュバツク。彼は、彼は、彼は――！いきなり部屋から全員廊下に叩き出され、談話室へと転がり落ちる。

「……ピーター・ペティグリューー！」

猫にフィニート。オレンジ色は逃げ去っていき、ダフネとわたしで挟み撃ち。手には杖なし、すぐに男はネズミに早変わり。逃げ去ろうとして瓶詰め。空気穴だけは開けてやる。

「……ピーター・ペティグリューーって、シエイラ。確かシリウス・ブラツクに殺されたんじゃない？」

「シリウス・ブラツクは、ブラツクに殉ずる覚悟もないクズです。そして、このネズミはならず者どもに殉ずる覚悟もないクズです。……スネイプ教授に突き出しましょう」

すぐに二人で教授のもとへ。詳しい説明は出来なくとも、ネズミを出して、目の細かい檻を作る。

「ここで呪文を使う許可は出していないが？」

「先生ならお分かりになるかと思ひまして、もう少しだけお許しください」

ぶるぶるぶるぶる震えるネズミ。しかしそれにかけるのは、アニメージェを人間に戻す魔法。途端に身体は膨張し、現れたのは先程と同じく中年男。教授の変化は劇的だった。

「……これはこれは……シリウス・ブラツクの腰巾着殿ではないか。あれに爆破されたと聞いていたのだが、ペティグリューー？ 何故貴様は生きているのだね」

「やつ、やややあスネイプ。久し振りだね……」

「我輩は貴様のごときネズミに呼ばれるほど落ちぶれてはおらんよ……」

杖を向ける。誰が見ても教授は激情に囚われていて、逃げ出せない。継るようにダフネを見、純血の慈悲深さに訴えかける。もちろん彼女は聞きやしない。そこにルーピンと犬が駆け付けひきつける顔。ネズミは二人に命を乞うた。

「くそつたれだ」

「十二年だ……お前を殺すためだけに十二年も待った！」

犬は男に早変わり。現れたのはシリウス・ブラック。目の前で始まるならず者どもの喜劇。最後にネズミはわたしに言った。

「も、もちろん君は逃がしてくれるだろう、ソーウエル。君は僕の娘じゃないか」

驚く一同。どうやら彼らは知らないらしい。もちろんそれは、事実でない。

「その狼人間の言うことを借りますが、くそつたれです、このクズが。それにわたしの父はあなたじゃない」

こんなクズに説明してやるまでもない。ソーウエルの特殊な生態は、彼を父とは認識していない。わたしの父は、間違いのない純血だ。逃げ場をなくして蒼白に。すぐにこの場に現れた魔法大臣とダンブルドアが尋問する。ブラックは無実を、ペティグリューは自身の潔白を吐き散らす。何て醜悪なならず者ども。曖昧に笑うルーピンなんて、昔のまままで変わっていない。

娘二人が邪魔なのか、ホグワーツ功労賞だけ与えられて追い返される。そうして後日知ることには、ペティグリューの勲章が剥奪され、代わりにブラックがそれを受け取った。そしてブラックは栄転し、ホグワーツ付きの闇祓いに早変わり。

激動過ぎる三年目。わたしは『ソーウエル』と『スワン』を喪った。

狂炎の魔杯

四年目へと入る前、わたしはパーキンソン家からグリーングラス家へと引き渡された。スワンが死んだから。何よりダフネがそれを望んだから。わたしはシェイラ・スワンになれたのだ。使用人であることは変わりはないけど。それでもわたしはわたしに成った。

しばらくはダフネの妹の付き人になることになり、わたしはその少女と対面する。二つ年下の少女、アストリア・グリーングラス。彼女は先祖にかけられた血の呪いを色濃く受け継いで、病弱な身体で入学を一年見送ったらしい。さもありなん、わたしが彼女について知ったのは、去年のブラックの騒動ではうっかり死にかねない虚弱さだった。

ダフネと同じ月桂樹を映し込んだかのような神秘の瞳。はっとするほど深い夜色の髪。今にも折れそうなほどの細い手足を見るだけで支えてやらねばと思いたくなる。ダフネが心配するのもよく分かる。

そんな彼女の珍しいわがままが、クイディッチワールドカップの観戦だった。彼女を溺愛する両親は、当然のことながらその願いを叶えてやった。

「こんな薄汚いポートキーに触れるですって？ アストリアに悪い影響があったらどうするの！ まったく、こんなものがありふれているというのだからマグルというのは……」

夫人はぷりぷり。気持ちはよくわかる。ポートキーだと送りつけられたのは錆びに錆びたバケツだったから。おかしい病気でも付着しては困る。ポータスの魔法が消えぬよう、夫妻はでき得る限りのことをした。

そうしてその日、グリーングラスの一家は会場へ。わたしも付き添い案内される先はマルフォイ家のテントの隣だった。

「グリーングラスじゃないか、珍しい」

「あらドラコ。久しぶりね」

当たり障りのない会話。わたしは空気、邪魔などしない。けれども

マルフォイはわたしの隣に目を向けた。純血同士面識ぐらいはあるのかと思いきや、どうやらそうではないらしい。

「ぐり、ダフネ。彼女は？」

「言い直すくらいだから分かっているでしょう？ 妹のアストリアよ」

澄まし顔でそう告げて、ダフネはお嬢様を促した。それに彼女は顔を真っ赤に染めて、か細い声で自己紹介する。

「お初にお目にかかります、ミスター・マルフォイ。わた……私、アストリア・グリーングラスと申します。どうぞお見知りおき下さいませ」

「……初めまして、ミス・グリーングラス。ドラコ・マルフォイだ。アストリアと呼ばせてもらっても？」

「……はい、もちろんです」

はにかむお嬢様はその場にいた誰も心を撃ち抜いた。ドラコはわたわた、ダフネはポーカーフェイスにやけを隠し、遠目に見ていたマルフォイ様のお父上もほっこり顔を緩めている。わたしもちらろん例に漏れず、心の中でほっこりした。

挨拶だけで別れるのかと思いきや、何とこのままドラコの方は一緒に来るらしい。お父上はどうやら公務があるらしく、優雅にその場を去っていった。取り残される子供達。

気を遣うだけの紳士ぶりを発揮したマルフォイ様は、ダフネとお嬢様とを観客席へと案内した。ちなみにおまけでわたしもそれに着いていく。飲み物などを任されて、わたしはマルフォイ様にお嬢様方をお任せした。マルフォイ様にはコーヒーを、ダフネには周囲に見えぬようフルーツティーを。そしてお嬢様にはハーブティーを用意した。

それを持って帰ってみれば、何とお嬢様が楽しげにマルフォイ様と語らっている。隣でダフネが拗ねているのが良く分かる。そつと飲み物を差し出しお茶請け代わりに少し摘まめるサンドイッチやスコーンなどを備え付ける。

そこでようやくマルフォイ様はわたしを見た。

「何だ、今度はグリーングラスに尻尾を振ったのか？」

そこに溢れる侮蔑の色。しかしこの場でやるのはまったく紳士でない。聞こえなかつた振りをして、もう良いけれど、どうせヒートアップするのならでき得る限り穏便に済ませてやらねば面子が立たない。

にこりと笑い、告げてやる。

「お優しいお嬢様方が引き取ってくださいましたので」

「フン……今度は一年保てば良いんだけどな」

痛烈な皮肉。パーキンソン家は三年保たなかったから。けれどもわたしはもう彷徨うことはしたくない。母の意思は叶えてあげたいが、わたしも自身を少しだけ尊重してみようと思ったから。スワンのようにはなれないけれど、その名を継ぐからには少しばかりは誇り高くなりたいたい。ほんの少しだけだけでも。

そこでお嬢様が咳き込んだ。

「お嬢様」

「けほっ、けほっ……っん、だいじょうぶ、です。ごめんなさい、ご心配をおかけして……」

水と薬を差し出して、お嬢様はそれをゆっくり嚙下する。少しだけ血色が戻って困ったようにはにかんだ。それを横目にマルフォイ様は目に見えたように動揺する。

「……知っていたでしょう、ドラコ。うちの妹は病弱なの」

ほとんど音なく囁いたダフネは気遣うように顔色を見る。瞳を見つめ、手を握りしめて様子を見る。もう大丈夫だという言葉をダフネは絶対に信じない。

「リア」

短く呼ぶその声には咎める色が含まれて。けれどお嬢様はそれを甘えるように受け流す。

「お姉様……もう少しだけ」

「……その代わり今回は泊まりはなしよ、リア。分かるわね？」

妥協してそれで、本当ならば今すぐにでも連れ帰りたいほどの焦燥に駆られているのが良く分かる。わたしだって連れ帰りたい。ゆっくり静かなところで寝床に寝かせ、安静にしていってもらいたい。けれどお嬢様はそれを望まないから妥協する。

そしてお嬢様も、妥協を引き出せたからそこで引き下がった。

「……分かりました」

「ん、良い子ね、リア」

滅多に他人に見せない甘い顔をお嬢様に向け、変な顔でそれを見ているマルフォイ様を威嚇する。

「何よ」

「いや……家族には甘いんだなと」

言葉を濁すようにそう言うマルフォイ様の顔は複雑で、緩んではいる。けれどその認識は少し甘い。家族に甘いだけの女なら、ダフネはスリザリンではないのだから。

「……そうね、肯定するわ。私は家族には甘い。家族の敵には容赦しないわよ、ドラコ」

向けられる鋭い視線。それに紛れもない敵意が見えて、マルフォイ様は微かに動揺する。理由が何にも分からないから動揺するのだろう。わたしには皆目見当もつかないけれど、ダフネにとってはマルフォイ様を敵視する理由があるらしい。

目を白黒させながらマルフォイ様は答えた。

「分かった」

「その言葉、忘れないで頂戴」

冷たく言い捨てたダフネは視線をクイディッチピッチへと移す。つられてマルフォイ様もそちらを見ると、丁度ヴィーラが登場した。パフォーマンスの一環らしい。けれどマルフォイ様はすぐにそれから目をそらし、静かにはしゃぐお嬢様を見つめていた。

空からレプラコーンの金貨が降り注いでも、試合が始まってさえ彼は今一つクイディッチに熱中しきれないらしい。視線はブルガリアの選手ビクトール・クラムとお嬢様とをいつたり来たり。

そんな中お嬢様がその繊細な手で口を押さえた。

「何てこと……ねえ、お姉様、ドラコ様、シーカーというのは点差も見えないほど忙しいポジションなのですか？」

その美しい視線の先で、確かにクラムはスニッチを掴んでいた。それで彼は自身のチームの負けを確定させたのだ。それがお嬢様には

理解できないらしい。潔く負けを認めたとは思えなかったようだ。

それにあまり集中しきれていなかったマルフォイ様はこう答える。

「いや、恐らくクラムは分かかっていて取ったんだ、アストリア」

「どうして……？　まだ頑張れば、ブルガリアにだってチャンスはあったかも知れませんが」

その純真な瞳には、疑問と理解できないものを受け入れられない拒絶が浮かんでいる。

「そうだな……そういう意味では僕には理解できない。だから臆測でしか言えないが、多分醜態を晒したくなかったんだろう。点数で勝てないだけで、シーカーとして自分が劣っていることを知らしめたくなかったんだ。ああすれば自分のプライドだけは守れるからな」

そしてマルフォイ様の瞳にも、同じものが浮かんでいた。それに更に嫌悪の色が増えている。クイディッチのプレイヤーとしてのファンは潔さを認めるだろうか。それとも——離れていくだろうか。もちろんわたしは興味などない。

と、そこで気を取り直したようにマルフォイ様がダフネに問うた。

「ところでダフネ、出るのか？」

「出るわけではないでしょう。他の誰かが出れば良いわ」

主語のない会話が交わされて、お嬢様とわたしは顔を見合わせる。すると何故だかマルフォイ様はニヤリと笑ってこちらを見た。

「なら、スワンはどうなんだ？」

「わたしは何も聞かされていませんので何とお答えすれば良いのか分かりません。ただお嬢様が望まれるのならその通りにするまでです」

それに対してマルフォイ様は笑うだけ。けれどもそこでお嬢様が口を出す。

「見たいわ、シェイラが活躍するところ。だってきつと他のどんな人より強いもの」

「御随意に」

間髪入れずに頭を下げて、思考をぐるぐる回す。いったい今年はホグワーツで何が あるというのだろうか。そもそもわたしは今年からまた何足かのわらじを履くというのに、面倒事の予感がする。

マルフォイ様は面白がって、ダフネは微妙に顔をひきつらせる。

「リア？ 分かっているの？ 危険だし、何より貴女のお世話にかかりきりにはなれなくなるのよ？」

忠告めいたその言葉に、お嬢様は小さく口を尖らせる。

「淑女らしくなさい」

「でも、お姉様だって思うでしょう？ シエイラは舐められすぎなの。皆、シエイラの凄さを思い知るべきなのですわ」

ふんすと気合いを入れるお嬢様は可愛らしいが、一体何の話をしたのかがわたしには分からなかった。そこで話は途切れたけれど、既にわたしは引き返せない。学期が始まり寮對抗クイディッチがなくなり別の行事が発表された。

トライウィザード・トーナメント
三大魔法学校対抗試合。フランスのポーター魔法アカデミーと北欧のダームストラング専門学校との合同行事で実に百年ぶりに開催されるらしい。若者の国際交流が目的らしい。しかし死人が出たので中止になって、百年放置だ。それに出るとお嬢様はおっしゃった。

とはいえ問題になるのは年齢線。十七歳以上の魔女と魔法使いしか認めてくれないその金色の線を越えて名を記した紙を入れねばならない。未だにわたしは十四歳あるいは十五歳だ。もつとも誕生日なんて知らないが。

まずは普通に紙を入れてみる。隣にダフネとお嬢様。周囲で何故か双子のウィーズリーが老けていて、末路が容易に想定できる。きつと今ごろはポーターもダームストラングも入れているだろう。

ゆっくりゆっくり近づいて、周りは静寂。紙を投げ入れる――

「へ？」

「は？」

「な、何で弾かれてないんだ!？」

普通に紙は受け付けられ、ウィーズリーの双子が嘆く声。またまた突撃更に老ける。わたしだって理由は知りたいが、とにかくわたしには資格があるらしい。顔を見合わせすぎさまダフネとともに寮監の元へ。

「先生！」

「何事だ、騒がしい」

「ねねね年齢線を越えてしまいました、どつ、どうしましょう!」

慌てて事情を説明し、職員会議が開かれた。査問の意味も込められているのかわたしだけが呼び出され、教授達の視線で穴だらけ。闇祓いの奇怪なぐるぐる目玉とボーバトンの大きな視線とダームストラングの鋭い目付きで滅多刺しだ。

「ダンプルドア、この生徒は何故年齢線を越えられたのですか?」

「スリザリンだ。闇の魔術でも使っていてもおかしくなからう」

ぐるぐる目玉の刺々しい声、理由はわたしが知りたいのだが――
「あ、もしかして」

理由がフツと浮かび上がる。刺さる視線、促される言葉に素直にそれを差し出した。

「わたしは孤児ですので出生記録が間違っているか――あるいは、これのせいかも知れません」

去年からずっと回し続けた小さな砂時計。それを見て全員が腰を浮かせ、寮監が怒気を露にする。

「何故君がそれを持っているのだね、スワン。許可なき所持は違法だが」

「そうなのですか? スリザリンの先輩方のご下命に従うには必須の代物なのですが」

そこで顔色を変えた人間は少なかった。明白に顔色を変えたのはイゴール・カルカロフだけ。ダームストラングの校長は、真っ白になって口をパクパク動かして。まさかまさかと繰り返す。ようやくそれが言葉になって、静けさの中に広がった。

「まさかお前は……ソーウエル、なのか」

「母はシャノン・ソーウエルと名乗っていました。わたしはシェイラ・スワンです」

そこで彼は唸って頭を抱えていた。つまり彼はわたしを、ソーウエルのことを知っているということだ。そこで眉を僅かにひそめたクラウチ大臣もご存知だろう。クラウチは確かに純血だから。

ダンブルドアは唸るようにわたしに問うた。

「ミス・スワン。君はいつからこれを、どのくらい使っておったのかね」

答えはもちろん『分からない』だが計算くらいはすべきだろう。頭の中で時間を数えて確かにそれが三年分以上に該当してしまうことを認識した。昨年四足のわらじを履いていたのだから、四倍弱の時間は過ごしている。

「去年から……恐らくは、三年分以上使っていたのではと。どれだけ回したか覚えてはいないので、推測にはなりますがそれなら辻褃は合いそうです」

「目的は」

「カルカロフ校長ならご存知ではないかと思えます。わたしの口から直接それを言うのは問題になりそうで……言っても構いませんか？」

小首をかしげて聞いてみれば、カルカロフは首がもげそうな勢いで否定した。

「いいや！ いや、いや！ そそそそれは君の名誉に関わるだろう。それに……ダンブルドア校長は何故かご存知ないようだが、知ればきつと口止めするはずだ。言わなくて良い。というか言うな」
「だ、そうです」

恐らくカルカロフは後からとんでもなく質問責めに遭うだろう。理由はそれで知れるはずだ。砂時計を没収されてわたしは解放された。あり得ないことではないが選手になる可能性があることだけは覚えておけ、と念押しされ、寮に帰れば静寂が。

何も知らない下級生たちは拳つて理由を聞きに来て、マルフォイ様やノット様に止められていた。そしてそれが正当な権利であることもまた証明してくれた。意外ではあったものの、一応認めてはくれるらしい。

グリフィンドールもハッフルパフも冷たい視線。けれどレイブンクローは案外好意的。どうやら理由は共有されたらしい。どの寮でも純血ならば理由は分かるのだろうかを受け入れられるかは別だそう。特にハッフルパフはセドリック・ディゴリーを推している。受け

入れる気はないのだろう。

そしてその日がやって来て、代表選手が選出された。ダームストリングからはビクトール・クラム。ボーバトンからはフラー・デラクル。そして我らがホグワーツからは何とわたしが選ばれた。冷やかな視線。けれどお嬢様が望むのならば、誰もを蹴散らしてしまいたいでしょう。

「——ハリー・ポッター」

「……は？」

そしてあり得ないはずの四人目が、代表選手に選ばれた。毎年毎年よくどこまで彼を巻き込めるものだ。どうでも良いし、何なら死んでくれても別にわたしは構わないのだが流石に今回はやりすぎではないか。ダンブルドアは——目立たないくらい程度で狼狽している。想定外なのか、どうなのか。

ポッターはわたしのように呼び出され、しかしわたしのような理由があるわけでもなかったらしい。すぐに流れ始めた噂によれば、ポッターが汚い手段で入れたのだとか。結果的にはわたしの手段もそこそこグレーだとは思うのだが、事前に狼狽して見せていたのが功を奏したらしい。ハッフルパフとグリフィンドール以外からは応援の声がかけられた。

意外かもしれないが、スリザリンは応援してくれるのだ。彼らのわたしの認識は一応純血ではあるらしい。その割には扱いが召し使い以下なのだがそれこそがソーウェルなのだから仕方がない。ハッフルパフからのヘイトがきつい。辛くはないが、彼らは一体誰を応援するのだろうか。

ハッフルパフは署名による抗議活動を行っている。題目は『ホグワーツの真の代表セドリック・デイゴリーを選手に』である。選手を選出するための杯はもう受付を終わっているので無理なのだが。デイゴリーはそれを笑みで誤魔化し止めもしない。

いよいよやってくる試練の日。内容こそ知らないものの、今は容易に推測できる。外で恐ろしげな声が響いているからだ。とはいえそれより気になることは——

「あの、わたし、聞き損ねたのでしようか。何故皆さんそんなに驚いていないのです?」

一斉に逸らされる視線。どうやら何かしらの鼻屑があつたらしい。わたしだけが除け者で、何の用意も出来ずにそれに挑む。確かにこれは死者も出るだろう。単独生身でドラゴンに挑めなどと言われるとは思つてもみなかった。

「私はどちらかと言うとオグワーツで貴女だけが知らない方が不思議よ」

Hを発音出来ないフランス訛りの英語がそう告げる。つまりポッターは知っていると。そういうことなのだろう。教えてくれるとは思わないが、ポッターが鼻屑にされているのはよく分かった。年齢はどうやら理由にはならないらしい。

「その、大丈夫か」

ぶつきらぼうに濁音ばかりが混ざるブルガリア訛りの英語が氣遣つてくる。しかしもうことはここに至っている。既に取り返しなどつくはずもない。そしてポッターは何も言わない。黙つていればまだ普通の少年なのに。こういうところがならず者どもの息子だと思わせる。

そしてわたしは運も悪いらしい。出番は最初、相手はスウエーデン・シヨート・スナウト。銀青色の大きなドラゴンだ。今は大人しくしているが、解説が叫ぶ限りでは奴は俊敏かつ高温の炎を吐いて骨まで灰に変えるらしい。ふぎけているし、ふぎけている。それから金色の卵を奪えと言うか。

「……これこそマーリンの髭とやらですね」

中央まで進み出て、わたしは青い炎に襲われる。

「グレイシアス、氷河よ。ヴェンタス、風よ」

一瞬にして氷は蒸発し、霧を産み出し視界を塞ぐ。風で勢いをつけてそこから退かなければ、わたしは形も残らない。そうしてそこから退いてみれば、巨体は隣でこちらを睨む。

かぱりと口が。

「いつ……エバネスコおっ!」

とつさに唱えたいいつもの呪文。全力全開何とか炎を消滅させ、なりふり構わずしなる尻尾に捕まった。手はずる剥けたがすぐさまエピソード。取って返す尻尾の動きで一気に卵のもとへ。そのまま自分で潰してしまいそうで卵にプロテゴ、地面にスポンジファイ。

わたしが跳ねる衝撃で卵も跳ねて、手を伸ばして全てを回収する。出口は全く反対側。

「アグアメンティー！ アグアメンティー！」

二度に分けての呪文行使で、地面を泥沼に変えて足を沈み込ませる。そこですかさずデューロで固め、効果が切れる前に持ち帰る。控え室に戻れた頃には既に制服はぼろぼろだった。

「……よく、無事に帰ってこれたね、スワン」

「気安く呼ばないで、ポッター」

こんな時だけ気遣いを発揮して、何があるというのだろう。クラムが出ていき帰ってきて、デラクールが出ていき帰ってきた。どちらもポロポロ、帰ってきたときには思わず制服をレパロした。

重苦しい沈黙、ポッターが行って、ポツリとクラムが呟いた。

「……君は、スリザリン寮でこき使われていた奴隷だと聞いた。しかしホグヴァーツの半分は君を応援しているみたいだ。その理由は何だ？」

「さあ。奴隷でも選ばれたのならば応援した方がクレバーだと思ったのでは？ むしろ何らかの卑怯な手を使ったか仕組みられたかしたポッターがグリフィンドル以外に応援されていないのが意外です」
「思ったよりもオグワーツは時代遅れみたいね。こんな優秀な魔女を奴隷に？ 奴隷制度が廃止されたのが何年の話なのか知らないのね」
ポッターがいなければ話が弾むのか。二人は死地の彼を見もしない。

「優秀……かどうかはまあ、置いておきますが。見なくても良いので？ ポッターを」

「必要ないわ」

「右に同じく」

一言だけで斬って捨てる。危なげもなく帰ってきたポッターを出

迎えたのは冷ややかな空気。僅かに彼は困惑したようだが次いでわたしを睨み付けた。

「何を吹き込んだんだ？ スリザリンのピエロが」

「そう言われても……」

直情径行はこういう時に損をする。同情を買ったわたしを迂闊に蔑めば、差別主義者の出来上がり。

「正々堂々、ね。グリフィンドールが泣くわ」

「言ってやるな、マダム・デラクール。名誉を傷つけることでしか彼は戦えない弱者なんだ」

冷ややかな視線。二人はそのまま去って行って、わたしも踵を返そうとして止められる。

「二人に何を吹き込んだんだ！」

「事実だけですよ。離してください、気分が悪い」

「話してくれたら離すよ！」

ならば離せとわたしは思った。既にわたしは理由を告げているのだから、これは最早言いがかりに近いだろう。とはいえ男の力に女が勝てはしない。ここでの呪文は許されていない。

故に、わたしはここで言葉という武器を使うのだ。

「今のあなたをあなたにくそつたれな父親が見たら歓喜するでしょうね、ポッター。ならず者どもの一味の息子。あなたの父親がわたしの母を弱者に追い込んだから、母とわたしはスリザリンの奴隷に墮とされた。今あなたはわたしを理由もなく拘束しているわ。ああ、まったくならず者どもの息子にふさわしい所業ね」

流れるように言った言葉は間違いなくポッターに突き刺さっただろう。緩んだ拘束を振り払って逃げ出して、後ろから怒声が追いかけてくる。けれどもわたしの方が三年分は、ホグワーツの内部を知っている。つまり彼を撒くなどお茶の子さいさいだというわけだ。

次の試練はと聞くことには、金の卵が知っているとのこと。ならばこれをどうにかせねばならないらしい。寮に戻り、とある部屋に入つて誰もいないことを確認してから卵を開いた。金切り音が耳をつんざく。まともに開けるのは不可能か。擬態しているわけでもなく他

に魔法のギミックは隠されてはいないらしい。つまりはこの音を聞くための何かが必要だということだ。

恐らく聞けば何かが分かる。火炙り、釜茹で、茹でる方が叫びがましだ。ならばあとはそれから条件を絞り込む。普通の水でも聞こえ方は似ているが、何となくはつきりしてきた気がする。思いきつて水の中に耳をつければそれが全ての答えだった。

卵の曰く、水の中に大切なものが囚われて、一時間以内に回収せねば二度と戻らぬらしい。つまりは泳げということか。使えそうな魔法は泡頭呪文か、あるいは変身術か。いや、いや、どちらもあまり意味がない。恐らくわたしは——泳げないから。

マグル式の潜水道具は持ち込み不可らしく、とち狂った方法しか思いつかぬ。それでも実用性はあるようで、結局それしか出来なくて。そうこうしているうちに、寮監から気難しい顔で告げられたこと。何故かダンスパーティーで、不要と思われたダンスを踊ることになっていた。代表選手は必須らしい。相手は早く見つけておけとも言われている。そんな人などいるはずも——

いやいや待て待て、誰かを選ばねばならないのだと、教授は言った。つまり何か理由がある。ならばそれにお嬢様とダフネを巻き込むわけにはいかないわけで、誰かを見つけねばならぬらしい。スリザリンの生徒なら、最後になれば誰かが来るだろう。しかしそれでは不味い気もする。

誰からも誘いは来ない。しかし誰かは見つけねばならないから。打算も込めて誰かを探す。そんな時に何とわたしは呼び出しを受けたのだ。きつと決闘か何かなのだろう。そう思つて向かつてみれば

「……何故、あなたが？」

「えつと……僕、聞いてみたくて。他の誰からでもなく君から本当のことを」

純血の子息。物好きな誰かだと思つていたが、まさか彼が来るとは思つてもみなかった。

「……ならば交換条件です。話す代わりにダンスパーティーと一緒に

行ってください」

「えっ!? いや、あの、スワン、その……僕なんかで良いの?」

「あなたに相手がいないなら。理由は後で話します」

怪しき満点の申し出を、彼はそのままこくりと受けた。からかわれるのは好きではないが、とにかくダフネとお嬢様には許可を取り、二人でホグズミードにも立ちよった。彼は思いの外例外を除いて思い込みは激しくないようで、落ち着きながら話を聞いてくれた。

思えば彼とはその日から、実に珍しい男の友人となったのだ。友人というものはほとんどわたしにはいないけれど。スリザリンから手出がないのだから、きつとある意味お似合いだとは思われたのだろう。流石にポッターとの友誼が損なわれているようで、最後には悪いが手酷く突き放そう。

着なれぬエメラルドグリーンのドレスを纏うわたしを、彼ははにかんで誉めてくれた。実にくすぐったく珍しいことに自然と顔が緩んでいる。印象づけは完璧だろう。彼がウィーズリーとポッターにさえ睨まれていないのなら、だが。

そして第二の試練がやって来て、わたしは寒い湖へと身を投じる。やったことは簡単なこと、まずはプロテゴで水を防いで空気を確保する。そして推進力として後ろに風を送って中心部へと突き進んだのだ。果たしてそこには少し太った彼がいて、彼を解放してプロテゴの中に取り込んだ。

「……スワン?」

「先に謝っておこうかと思いましたが。端的に言えばわたしはあなたを利用してこの試練に挑みました」

それに彼は目を瞬かせる。そんなに意外なことだろうか。わたしはスリザリンなのに。

「うん、分かってるけど……?」

「この後わたしはあなたを突き放すつもりです。それでわたしとあなたの関係はまっさらに戻します。だから、その……ポッター達と仲直りしてくださいね? どれだけ悪く言っても良いので」

「君ってさあ……うん、君がそうして欲しいなら頑張るけど、悪い奴

じやないのは知ってるから。ばあちゃんが言った、スワンを気にかけてやって欲しいって。何となく理由は分かったからさ、だから……そんな泣きそうな顔で言わないで」

泣きそうな顔？ 何のことか分からない。けれど彼の手はわたしの頬に触れていて、目元を拭って頭を撫でてきた。何故だか不思議と悪い気分じやない。本当に何故かは分からないけれど。

不慮の事故もあったそうだが、無事に第二の試練も終了した。後は最後の一つだけだ。それがどうにも落ち着かなかった。

「ソノーラス」

緩んだ顔でこちらを見つめる哀れなグリフィンドールの純血に、わたしは平手打ちを食らわせた音をお見舞いした。そして全員に聞こえるように嘲る声をかけてやる。

「滑稽な時間をありがとう、グリフィンドールの誰かさん。本当に都合の良い存在だったわ。どうぞ、お仲間のところへお帰りなさい。スリザリンに少し近付いただけで仲間を見捨てるようなところへね」

「なっ……」

「分からないの？ あなたはわたしに利用されただけ。さようなら」

空虚に笑みを浮かべてやれば、彼は顔を紅潮させて怒り出す——ことはなく。杖も抜かず、手も出さないで言葉だけをわたしにくれた。

「ああ、うん。さようならだ。僕はハリーのために君の懐にいただけなんだから、勘違いしないでよ……でも、ありがとう」

最後だけは眩きで。そうやって彼が勇気を見せたから、ホグワーツ内の応援は真つ二つに割れた。スリザリンはわたし。レイブンクローは半々。グリフィンドールはポッター、そしてハッフルパフは意外にもポッター。大方デイゴリーあたりが支持したのだろう。実に興味のない話だ。

そんな時にわたしはある人から呼び出しを受けた。というより強引に連行された。向かう先には馬車があり、大きな女性が待っている。

「……マダム・マクシーム？」

「よく来ましたね、ミス・スワン。どうぞ中へ」

導き入れられ彼女の言うことには、ホグワーツが居づらくなつたらいつでもボーバトンへ編入していらっしゃい。目には哀れみ、態度には懐の大きさを演じている。

「……軽蔑はされないのです？」

「私がオグワーツで軽蔑するとすれば……それは貴女ではありませんよ、ミス・スワン。貴女ほどの優秀な魔女を奴隷扱いさせた者共全員が愚かなのです」

穏やかな笑み。そこに嘘は見て取れず、しかしてそれをわたしは受け入れない。

「わたしは、責任を取らねばなりませんから。ですからこの先の混乱が終わるまでは……この国から出るつもりはありません」

「それは、貴女ではなく貴女を利用した人間が取るべき責任ではないの？」

「いいえ……いいえ。利用するものに罪あるのなら、産み出したものにも罪あるべきでしょう」

実に抽象的な話。恐らくマダムには半分も理解してはもらえなかつただろう。カルカロフがどこまで説明したかは知らないけれど、彼からでなく彼女からこの話が来たということは微妙に後ろ暗いところが明かされたのだろう。

その後わたしはマダム・デラクールと会話して、いつしか友人となっていた。哀れみから始まったような気もするこの関係は、しかし試練が終わればなくなるもの。少し寂しくはある。

とはいえ試練はいつでもやって来る。最後の試練は生け垣迷路の中心にある杯を手に入れること。それで全てが決まるのだから、わたしが気合いを入れられないわけもない。壁は壊せずとも星を読めば中心への方角など容易に分かる。

進む、進む。赤い花火が一つ二つ。障害など見ることもなく、中心へ。そこでやっと障害が現れる。意味不明な海老のような合成獣。まるでわたしのようだ和别人事のように思いながらもせめて苦しまぬようにと腹から頭へ魔法で貫いてやる。安らかに眠れ、合成獣。お前のことはもう忘れた。

見える杯、届かぬ手のひら。そこにポッターが現れて、急に敵襲が減ってきた。とはいえ面倒な人間もいたもので、虚ろな視線でコンフリンゴ。誰かと思つて見てみれば、そこにはクラムが夢を見ているような表情で杖を振る。

服従の呪文か。とはいえそれで攻撃されようが、意思の乗らぬ魔法など痛くも痒くもない。お人好しのポッターは何故かわたしに加勢した。

「……今のうちに優勝杯を取ればどうです、ポッター」

「別に僕はそうしたつて良いんだ。でも、このまま取つたら僕の寝覚めが悪い」

「実にグリフィンボール。取れば良いわ。こういうのは悪役でなく正義のヒーローが取るのがお約束なんですよ、ポッター」

やれやれとクラムを縛り上げ、ポッターに背を向け生け垣に固定する。すると彼は何を思ったのか腕を掴んで優勝杯に共に触れさせた。身体の芯が引きずられ、その場から移動する感覚。これは確かポートキーの感覚か。

気付けばそこは見知らぬ墓地で、周囲には怪しげなフードの集団が。

「……………ここは……………」

「……………え、トム・リドル？　ちよつ、これはまずいのでは？」

「ここがどこか分かるのか？」

飛んでくる魔法、盾の呪文は間に合わない。ギリギリ身体を捻つてかわし、ポッターに向けて低く呟いた。

「バジリスクといった幽霊の名前がトム・リドルだったはずです。つまりはヴォルデモート卿。これはその父親か何かの墓では？」

それを聞いてぎくりと顔をこわばらせ、ポッターは呪文を受けて墓石に縛られる。なのに、何故かわたしはそのまま。

「その通り。健勝そうで何よりだ、ソーウェル」

瞬間、わたしは理解した。何のための任務で、何のために母があつたのか。我が一族、などと大層なことを言うつもりはないが、それが何のために用意されたものであつたのか、わたしはすっかり理解して

しまった。

「……そう思いたいのなら好きにすれば良いと思いますが」

「任務は終わったのだろうか？ その姿、その瞳。お前の父親はどうやら俺様ではなさそうだ。最後の任務は俺様と果たすつもりはあるか？

スリザリンの愛妾、スリザリンの最高傑作よ」

にたりと歪むその赤子の笑みは不気味でしかない。そんなことを言うのだとすれば恐らく彼は成人男性に戻るつもりがあるのだろうか。どういふ公算かは知らないけれど。

「いえ、済みませんがあなたでは理解出来ないかと思えますので、お断りします。あなたは愛を理解しない方だと聞いていますから」

「……ほう？」

「わたしの髪は、わたしの瞳は、愛によって染まる魔法。最後の任務と呼ぶべきものは——もう、終わっているのです」

その理由を彼は理解しないだろう。あるいはこれこそが愛の魔法。心を捧げあった末に出来上がる未来への連鎖。それが最後の証となる。ならばそれは既に成されているとわたしは信じた。ハツタリであろうがそれを捧げるべきは目の前の男ではないのだから。

しかし忍び笑う赤子は今度こそわたしを拘束する。

「そこで見ているが良い、ソーウエル」

スワンだ、と言いたくはあったが最早それは不可能で、口には嚙が噛まされている。大釜の中でおぞましき儀式が始まった。父親の骨、しもべの肉、敵の血。古来より伝わる忌まわしき魔法だ。ポッターは血を取られておぞましさに震えている。

そして出来上がった鼻なき男。彼こそは闇の帝王、ヴォルデモート卿。周囲に死喰い人を従えて、そこに彼は君臨する。闇の印に杖が当てられ更に増える、増える、増える——そしてその中には、首輪を嵌められた白い娘がひっそりと混ざっていた。

ヴォルデモートがポッターの縄を外し、決闘ごっこを始めていても。わたしは動くことが出来なかった。縄などなくとも動けない。目の前で人質に取られている少女は紛れもなく——任務の果てだった。

虚ろな赤い瞳。向けられる視線。それは全ての罪をわたしに突き付けて。黄金の橋が生まれていても動けない。ポッターは物言いたげな視線でこちらを見ながら一人で優勝杯を掴んで消えていった。

「さあ、ソーウエル」

「……わたし、は」

「迷う必要などないだろう？ お前には既に退路などないのだから」
分かっていた。その通りだった。当然のことだった。だからわたしは闇に堕ちるしかなかった。光で取れぬ責任を取るために。数多の命のために。付き添い姿くらしでその場を去って、マルフォイの家へと転がり込んで。

そうして宴が始まった。

服従の死兵

苦痛。それはわたしにとっては快樂と同義だった。けれどそれはわたしに限ったことではなかったらしい。もうオブスキューロはされないけれど、逃げ出すこともまた出来やしない。もう戻ることは出来ない。どんな場所にも——ここが、わたしの場所だから。

幾度にもわたる任務にももう慣れきってしまった、けれども極度の疲労からかわたしはもう動くことすらままならなかった。指一本動かすことですら億劫なのだ。そんな人形娘を今日も彼らは使っていた。

そんなある日のこと。好奇心からかマルフォイがわたしに与えられた部屋へやって来た。

「なっ……ふっ、服ぐらい着ろ！」

「……マルフォイ……様？ どうせ……無駄になるものを、どうして……着る必要が？」

まだこういうことに耐性がないのか——いや、そういえば前回の任務にも参加はしていなかったか。だからここまで真っ赤になって狼狽える。ホグワーツで晒していた姿とほとんど同じだというのに、純情な少年だ。

ゆつくりと呼吸を整え、ちらりとマルフォイを見る。何故か制服だ。

「……どうしてそんな格好なので？」

「何でって……今日から始業だからだろう。その前に任務を言い渡されてきたんだ」

何の、とは彼は言わなかった。ただ任務とさえ言えばこちらが分かるだけでも言いたげだ。そしてそれは自明の理であり、わたしには彼が何のためにここに押し込まれたのか分かってしまった。つまり、今からわたしは——

「……済みませんが、起き上がるだけの体力がなくて。近付いていただけますか」

「あ、ああ。いやでも身体は隠せよ」

彼は実に紳士だった。ゆっくり近付き、わたしの横たわるベッドの横に立った彼をわたしはそのままベッドに引きずり込んだ。

「なっ……お、おい！…何して……んむっ」

水の音。わたしはマルフォイの言葉ごと全てを飲み込ませた。それだけでわたしには彼が普通の男の子だと分かってしまう。

「……これが、任務です。任務の終わりには……連れて行ってくださいね。わたしではないわたしを」

わたしはうまく笑えただろうか。彼はひどく苦しい顔をしてそれを受け入れる。苦痛。彼に絡み付いてそれを出来るだけ早く終わらせてやらなければと思う。わたしはもう通えないけれど、マルフォイはホグワーツへ行かねばならないのだから。

彼は我慢強かった。本能で分かっていたからだろうか。けれども悲しいことにわたしは百戦錬磨なのだ。文字通り。いつもの誰かよりは遅かったが、確かにわたしは彼から受け取った。そして激痛。それを見てマルフォイの顔が歪む。

「スワン——！」

「誰もっ……呼ばないで、マルフォイ様……っ、これも、任務、なんです……うっ」

ひゅうひゅうと死にそうな呼吸。急激に膨れたそこから産み出されるそれ。それはすぐに幼い少女の形を取り、十一歳くらいに見えるようになった。

「なっ、何なんだ……何なんだこれは——」

「……ふう……っ、ん、はあ……っ、ふう、それは『わたし』です」
そう定義付けてやれば、すぐにその『わたし』は同じ姿になった。マルフォイの懐からわたしの杖を探り出し、それを振るってスリザリンの生徒となる。

「おぞましい、でしよう……っ」

虚しく響くその言葉。事実だろう。誰にとっても。けれどマルフォイはかすれた声で哀れみを示す。

「……お前、任務って……ずっとこんなことを？」

「軽蔑しましたか？」

その言葉に様々な色をマルフォイは浮かべた。そこにはただの思慮深いやさしい少年がいた。

「……いや。このこと……アストリアには言うのか」

『わたし』がそれを明かすことは禁じられています。でも……全ての罪は償わなければなりません」

それは遠回しの肯定だ。いずれアストリアにも言わねばならないだろう。お嬢様と呼ぶことすらもう出来ない繊細なあの方に、聞かせたくないことでも。知りたいと望まれるのならば伝えなくてはならない。

「そうか……」

そこに浮かんだのは哀れみだろうか。わたしは哀れまれるべき人間ではないのに。彼はそのまま『わたし』を連れていき、またわたしはここでひとりぼっち。けれども今までとは違ってきちんとした食事が差し入れられるようになった。

いつものように苦痛が始まる。

「……悪いが、解放はしてやれん。利用させてもらうぞ、スワン」

彼はその名でわたしを呼んだことはなかったはずで、だからこそ印象付けられた。幾度となく彼はわたしと任務をこなし、苦しげな顔で去っていく。悪名高い彼であっても良心は痛むのだろうか。わたしはそれを黙っていた。

いつしか食事を持ってくるメイドも『わたし』に変わり。いつしか見た目だけ装った『わたし』がマルフォイの家に溢れていた。たまにやって来るヴォルデモートがそれに気付いた様子はどこにもない。

不思議なことに、ヴォルデモートとだけはどれだけ頑張っても任務を果たすことが出来なかった。まるで運命か何かが悪魔をしているようだ。欲だけはあるだろうに、それではやはり足りないらしい。

苦痛の途中に夢を見る。きちんとした意識を持たされている『わたし』は色んな所にいた。今日の夕食はスープが良いと思えばそれが反映され、アストリアを助けたいと思えば自然と助けていた。そして一人の少女と出会う。

「あんた、変だ」

「あなたにだけは言われたくないのですが？」

直球でそんなことを言う彼女の方が控えめに言つて変だった。蕪の耳飾りにコルクのネックレス。夢見がちな少女の瞳は焦点が合っていないようで、『わたし』ではなくわたしに焦点が合わされている気がしてならない。

「うん、あたし、よくルーニーって呼ばれる。だから変なのは認めるよ」

「……済みません、言い過ぎました」

今日も今日とて夢を見る。ホグワーツではピンク色のカエルが蔓延つて。大人しく従順な生徒達を管理したがっていた。グリフィンドールがそれに従うわけがないのに。とはいえ『わたし』も手伝う立場だ。アンブリッジとかいう権力に飢えた女は好き放題使える『わたし』を自由に扱った。

「夢だったのよね。貴女をこうして扱えるのは上流階級のステイタスだもの」

まるで無邪気な童女のように杖を振るう。クルーシオ、クルーシオ。苦しんでいる振りをしてやる。喜ぶアンブリッジ。まるでごっこ遊びのよう。いつしかわたしは『わたし』のせいで、それに耐性がついてしまった。十何年越しかの成果である。

時には融通の聞かない『わたし』にインペリオ。ふわふわ心地はもう消えた。何度も何度もかけられて、こちらも既に効かなくなっている。こうなるまでに何回喰らったことだろう。数回？ 十数回？

数十回？ あるいは数百回？ 既に数字に意味はない。

がつりと衝撃、引き戻されて苦痛にあえぐ。何度そうされたところであなたと任務は果たせないのに、どうしてそこまで拘るのか。理解が出来ない。不気味な笑みが恐ろしい。何かの確信を抱いてはいるようだが、それが何なのかわたしには分からない。

同じ部屋で暮らしていても、ダフネはもう『わたし』と目も合わさない。気付かれているのだろう。けれども彼女は誰にもそれを言いはしない。言う意味がないからなのか、それとも何か考えているのか。それすらももう感じられなくなっていた。

「そんなこと、いつまでだって続かないよ、シエイラ」

「分かってるわ、ルーナ」

狡猾な当主マルフォイはもう自分以外を逃がし終えている。後は次期当主と自分だけのはず。なのに彼は逃げようともしていない。理由が全く分からない。

いつしか人が増えていて、見知らぬ女がやって来た。

「ふん、出来損ないが。せつかくあの方の寵愛を戴いているっていうのに……！」

どこかマルフォイ夫人に似た彼女は思う存分わたしでその憤懣を解消した。他の誰より強力なクルーシオ。どこぞのカエルなぞより倍は強力だ。それでも耐える。耐えられる。何故ならもうそんな感情は消え去ってしまったから。

苦痛の中で、また夢を見る。あまり自我のない量産型の『わたし』はぼんやり歩いて薄暗い場所へ。小さな水晶が並ぶその部屋で、気付かれぬようするりと一つ、手に取った。

『大いなる狡猾な蛇のつがいはいずれ滅びるだろう。破壊と絶望の扉は開かれる。最後に残るものはなく、つがいは跡形もなく消え去るだろう』

ああ。もちろん。跡形もなく消え去るだろう。何故ならそこにいる『わたし』は死ぬためにそこにいる。絶望の果てに破壊をもたらすためにそこにいる。かつてスリザリンに連なる純血の子を大量に残すべく産み出されたホムンクルスの子孫が何故滅びないと思うのか。

待ち構える死喰い人ども。そこに向かうポッター達。そして罠にかかったポッター達は、ポッターの予言を手にして囲まれた。

「やっぱりお前はそっち側なんだな、スワン！」

吠えるポッター。しかし『わたし』は反応することすら出来ないのだ。何故ならそこにいる『わたし』には自律行動出来るだけの知性はないのだから。

代わりに夢見がちな声が歌うように告げる。

「違うよ、ポッター。それはシエイラじゃなくてソーウエルだし、でもやっぱりどこかスワンなんだ」

「悪いけどルーナ、黙っててくれ」

ポッターにバツサリ言葉を切られていたけれど、それは確かに真実だった。

「予言を渡せ、ポッター。さもなければ魔法省を破壊する」

「誰が渡すものか！」

そして呪文の応酬、応酬。『わたし』は何も出来ずに立ち尽くし、その異質な状態に目を付けた茶髪ふわふわが皆を『わたし』の身体を盾にして撤退させ始めた。なるほど賢い方法だ。何故なら彼らはその時まで『わたし』を殺せやしないのだから。

闇祓い達も駆け付けてきて、魔法省の地下で派手な戦闘が始まった。呪文の嵐。『わたし』はその中でただひとりぼうっと立ち尽くしている。何故ならまだ出番ではないから。だから気付いた。ニヤリと笑うあの女。名前は確かベラトリックスとか言っただろうか。彼女が呪文を発して、それを無意識に追いかけて――

そして、憎い男を抱えて投げ捨てる。

「……生きて苦しんで。ならず者どもの罪はいつまでだって禊げない。早く逃げて」

「なっ――」

「裏切ったな、ソーウエル！」

激昂するベラトリックス。しかし『わたし』はもう反応しない。ブラックに反応できたのは彼が憎いから。あのままアーチに突入すれば呆気なく死ぬと分かっていたから。だから投げ捨てた。呆気なく死なれたくはなかったから。

「クルーシオ！」

ベラトリックスの怒りのクルーシオは限界を超えそうなほどの苦しみを『わたし』に与え。その直前で止まって崩れ落ちる。そこに現れたのはヴォルデモート。彼がそれを止めたのだ。しかしもう『わたし』の運命は決まっている。

「ポッター、予言を渡すのだ」

「ふ、ふん、もうあんなもの壊した！」

グダグダ言っている暇があるなら逃げるが良い。これこそがわた

しの任務の真髄。ありとあらゆる意味で間違った使い方。意志薄弱ながらも残酷に虐待され続けることによって発生してしまう、最低にして最悪の――

「なっ――」

「うっ……ああああああっ!」

叫び。白い身体の中から沸き立つ黒き靄。ひきつる顔で逃げ出す子供達。死喰い人は今の隙にと呪文を放って。身体が震え、『わたし』の視界が閉ざされて――そして。

魔法省が、崩壊した。

死者は魔法族の割に多く出て、魔法省はその機能を停止した。それを発生させたものを、ダンブルドアは『オブスキュリアル』と呼んだ。抑圧された魔法使いに『オブスキュラス』と呼ばれるものが宿り、暴走した結果があれだと言ったのだ。かのグリンデルバルドが利用したものらしいがわたしにはさっぱりだ。

学校の『わたし』はすぐさまポッターに糾弾され、アンブリッジの手によってあわや大惨事となりかけたところをダンブルドアが止めに入った。そのまま眠らされて監禁され、二度と起こされることはないだろう。そう言っているのが聞こえた。

しかし忘れてやいまいだらうかとわたしは思うわけで。抑圧された結果がそれだというのなら、更に抑圧すれば暴走するだろう。学舎の中でそれはきつとまずい。だからダンブルドアは『わたし』をどことも知れぬ絶海の孤島へと連れ去った。そこなら誰も死なぬと思ったのだろう。

「……そういう理由なら、下手に監禁しない方が良いと思いますか」

「お主……起きておった、いや……?」

探るような目でこちらを見てくるダンブルドア。見るだけならば良いが開心術は喰らってやれない。何故ならそこにいるのは『わたし』でわたしではないから。

「流石、察しがよくて助かります、先生」

「ミス・スワン……いや、シェイラと呼んでも良いかのう?」

「愛着が湧くと切り捨てにくくなるので止めておいた方が良いかと。」

改めて解説が必要ですか？」

きらきらと輝く青い瞳がそれに答えた。

「うむ、そう言われると聞きたくなるのが性というやつじゃな」

実に鬱陶しい答えだ。しかし言ってしまったからには伝えねばならない。おぞましい、スリザリンに伝わる伝統を。

「さて、先生はわたしが何のためにあの逆転時計を使っていたかご存知ですか？」

「カルカロフから聞いておる。スリザリンの全ての純血の小間使いとして働くために必要であつたと」

それはまさに綺麗事で塗り固められた本当のことだった。

「飾らず言えば純血製造機ですね」

「それを是とは言わさぬよ。お主もわしの可愛い生徒じゃからの」

「止められもしないくせにそんなことを言われても……まあ、それは置いておきましょうか」

何か言いたげにこちらを見てくるが、わたしはそれを無視してやった。その問答に意味などないのだから。終わつたことは変えられない。変えるつもりもないのだから。産み出したものの責任はきちんと取らねばならない。

「では、『スリザリンのS』のことは？」

「かつてサラザール・スリザリンの造り出した純血のためのホムンクルスじゃろう？ それがどうし……まさか」

自分で言っておいてようやく理解できたらしい。そう、スリザリンのSこと『シャノン・ソーウエル』は、彼の生きた時代から脈々と続くホムンクルスの群れなのだ。途切れかけた純血の血を保存し、次代へと繋ぐためのシステム。それが、わたし。

「そうです。わたしが、母が、祖母が、そのまた先までいくら遡ろうとも。シャノン・ソーウエルは純血のためにあります」

「……いや、もしそうであってもミス・スワン。お主はお主じゃ」

どこまでもおめでたい頭をしている。いや、推測できようはずもないのだからそれがわたしにかけるに相応しい言葉だと思つたのだらう。だが、違う。ここにいるのは『わたし』でわたしではないのだから。

ら。

「純血の子をいくら孕もうが、次代のシャノン・ソーウエルを名乗れるのはたったひとり。わたしもそうで、母もそうであったのです」

「と、いうと……」

「あなたはこれを愛だと呼ぶでしょう。父の髪と瞳の色を受け継いだ者のみがシャノン・ソーウエルを名乗れるのです。そして、受け継ぐ条件は相思相愛であることです。そうでなければこのように、白い髪と赤い瞳の娘ばかりが産まれますから」

白い髪と赤い瞳。ダンブルドアの目の前にいる『わたし』は瞳だけを誤魔化している。それを解いた。そしてわたしの瞳はシルバークレイ。とある人物と同じものだ。髪はとうの昔に色を失ったが、そうなる前は黒かった。

驚愕に目を見開く彼にわたしは告げる。

「わたしからシャノン・ソーウエルが産まれたならば。わたしは彼女がホグワーツに通う前に死ぬでしょう。そして呪いが効力を発揮します。いつかどこかで同じ名のシャノン・ソーウエルと出会っていても違和感を覚えないようになる。母の名を継いでいることに疑問など感じないのです」

それはわたしという意味の喪失にも似て。シャノン・ソーウエルを知ったダンブルドアは激しく嫌悪を露にした。

「そんなものは……愛とは呼ばぬよ」

「そうですか」

沈黙。けれどずっとこれ続けるわけにもいかない。きちんと彼には言わなくては。

「なら……お願います。わたしを、シャノン・ソーウエルを名乗れない数多の娘達を。どうか、皆々塵殺してください」

「そ、れは……」

「誰の発案かは知りませんが、ほとんど全員が魔法省を破壊した『わたし』のようなオブスキュラスを秘めています。一昨年はそれを量産するのが任務でしたから」

がたりと音を立ててダンブルドアが身体を乗り出した。そんな馬

鹿なあれはグリーンデルバルドがなどとぶつぶつ呟いて、それら全てが答えにならないままに消えていく。

戦慄く唇が、答えを乞うた。

「それは、何人くらいおるのか……？」

「千人は下らないでしょう。品種改良されたのかわたしは一日あれば全ての行程を終わらせられてしまいますので」

最早それは絶望の数字。改めて言えば狂気の所業でしかない。よくぞここまで壊れずに生きてきたものだ。我ながら感心してしまう。それに特化したホムンクルスだからこそ出来ることだ。いつ誰がそのようにシャノン・ソーウエルを改造したかは知らないが、何代も品種改良は進められていたのだから。

父親の胤と自身の卵を掛け合わせ、腹の中で錬成されるホムンクルス。常人より早く育ち、シャノン・ソーウエルでない娘達は父親と同質の遺伝子を保持しながらその姿を変えるのだ。父親の望む姿に。性別すらも越えて。そうしてあるものは奴隷として生き、あるものは中継ぎの当主として血を残す。擬態した娘達の正体を暴く術はない。

最早人間とすら呼びたくないほどのおぞましき生き物。それがシャノン・ソーウエルより産み出されしホムンクルス達だ。彼女らはただ純血のためにある。純血はそれを慰み物にしても構わないし、どんな魔法実験に使っても構わない。

「お主の……本体も、かね」

「もちろん。シャノン・ソーウエルの血を継ぐホムンクルスどももの中でも一番強力なオブスキュラスを宿しているでしょうね。わたしは筋金入りですから」

だからこそいつか大きな破壊をもたらすために使われるだろう。たとえば、目の前の疲れはてた老人を殺すために、だとか。

「……では、先生。そろそろ……さようなら。いつかまた会う日まで」
するりと杖を胸に当て、あのとときの母のように囁いた。

「アバダ・ケダブラ」

緑の閃光。意識だけが苦痛の中へと戻っていく。いつもよりも強い苦痛を感じながら、虚ろな瞳を天井に向けて。耳障りなクルーシオ

を聞きながら。

煉獄の人形

ベラトリックスに手酷く拷問されたわたしはエピスキーでは癒えないほどの傷を負わされた。おかげで苦い薬やら何やらを飲み続ける苦行の真っ最中である。代わりに苦痛はないが。流星に身体の色まで変わったグロテスクな女体はお気に召さないらしい。ありがたい休みだ。

そんなわたしを教授が甲斐甲斐しく介護してくれた。ヤバイ薬を呑まされ塗られ貼られていても、すぐにその傷は治らない。酷く見苦しい姿であろうに、教授は眉をひそめることなく淡々と世話をしてくれる。

「……あり、がとう、ごございます、せんせ」

たどたどしくお礼を言えば、教授は顔を歪めた。スネイプ先生。母の想い人。魔法薬学者で、死喰い人。分かっている。既に穢れ果てたわたしだから、触れてはいけない人だとは、分かっているのだ。触れられないほど尊く気高い人。けれど。

「喋るな。傷に響くだろう」

厳しい顔でこんなやさしさを発揮されてしまったら、もう、止まることなんて出来やしなかった。わたしはこの人を救わねばならなかった。どんな手を使ってでも。生き延びてもらいたかった。

「で、も……っ、やらなくちゃ、先生……っ、わたし……」

無理矢理起き上がって。制止されてもわたしが止まるわけがない。所詮は彼のためではなくわたしのエゴ。拒否されたって聞いてあげない。

「馬鹿者、大人しくしている！」

叱咤する教授。けれどわたしはそれを飲み込ませた。視界が歪む。痛みでくらくらする。けれど、やらなくてはならない。出来ないとは思わない。無言のままにステューピファイ。そしてわたしは母の代わりに本懐を果たした。思ったよりも満足は得られなかった。

怒るだろう。哀しむだろう。軽蔑されるだろう。けれど、この人の

ためならばわたしは人でなしにだってなれるから。緩んできた呪文をかけ直し、激痛をやり過ごしてそれに定義を与えてやる。それが出ていき、程なくその『わたし』は呼び出された。

しばらく経って、何やら怪しい呪いに冒された『わたし』が帰ってきて。ようやくわたしは『わたし』が彼の色に染まらなかつたことを知った。それはそうだろう。あんなことをしたわたしを愛してくれははずがない。分かってはいた。けれど悲しかった。涙はもう溢れない。

「……何故、こんなことを」

かすれて疲れ果てた声が問うてくる。答えなんてない。ただそうしかつたから、そうしただけ。きつと、きつと、彼が愛しているのはひとりだけだから。だから彼は母に振り返ることはない。永遠に。母は。きつと、こうしただろうと思つたんです」

「そんな……馬鹿なことを言うものではない。ソーウエルは……あの人は、そんなに弱い人ではない」

その叱咤こそ弱々しかつた。母は弱い人だつた。同情と愛を向けたかつたのがこの人であつて、憧憬と愛を向けさせられたのが別の人物だつただけ。その人物も既にこの世には亡い、と思う。流石に母の娘達がどうなつたのかまでは知る術もなかつたから。

もう笑い方も忘れてしまつたから、笑えているかわからない。

「弱い人ですよ。あなたが好きだつたことを一度も口に出来ないくらいには」

「それは……」

「あなたには心から愛する人がいる。だから、母は黙つていた？ そんな強い人じゃありませんよ、あなたの知るシャノン・ソーウエルは。嫌われたくなかつたから。あなたとの関係を決定的に変えたくなかつたから。だから、何も言えなかつた。怖かつたから」

教授の心が特定の人に向いていると知つて、闇に堕ちて。けれど彼はダンブルドアの下へと降つた。それを知つていてなお母は何も言わなかつた。彼に死んで欲しくなかつたからだ。だから、何も言わずにヴォルデモートに囚われていた。守るために。

血の保存のために監視役として置かれていた少年と、母は奇妙な関係が続けた。娘達を産み出し続けながら少年と暮らしていたのだ。その先のことは知らない。断片的にしか分からないことだから。断言など出来ようはずもない。はつきりしていることは、最終的にマグルに拾われて隠れ住んでいたらしいという事実だけだ。

「……我輩は……僕は」

「答えは必要ありません。あなたが愛する人に殉じるといふのならそれも好きにすれば良い。わたしも好きにします。母が、生きていれば。きつとそうしたから」

まあ、その結果がポッターを守ることになるというのは流石に業腹なわけだが。母の精神をぶち壊した男の息子を助けたくはない。ただ、死ぬとは思わないし、何なら生きて苦しめば良い。死ぬことは救いにもなり得るのだから。だから、守ってやらんでもない。

その後教授は一言も話すことなくわたしの治療を終え、ホグワーツへと戻っていった。やはりわたしを振り返ることはない。分かっていたことだった。彼は先生で、わたしは生徒で、級友の娘。それだけだから。

そして何故か入れ替わりに——別の人間と同居することになった。

「……シエイラ？ 何てこと……どうして、どうしてこんな……！」

悲痛に顔を歪める少女は一年ぶりに直に見る少女。ダフネの妹。かつてわたしが仕えていた娘。アストリア・グリーングラスだった。前よりは少し大きくなったようだが虚弱さは変わらないらしい。手をつかんでくずおれる彼女は立ち上がることすら出来そうにない。

「……おじよ、アストリア、様？ どうしてここに……？」

何故彼女がホグワーツでなくここにいいのか、わたしには全くわからない。けれど彼女はそれに答えてはくれないらしい。柔らかく温かい手のひらでわたしを撫でるとやさしく抱き締めてくれた。冷たい雫が頬を伝う。どうやら心配されていたらしい。

「こんなに痩せて……青い顔をして……どうして、どうしてこんな扱いに甘んじているの？」

「それを、アストリア様に説明する理由はありません」

「シエイラ」

「ごめんなさい。でも、説明するつもりは本当にないんです」

そう、説明したところで何の意味もない。わたしが選べるのは最後に死ぬことだけ。コントロールを失う前に、殺意を持って唱えるだけだ。酷く簡単なこと。そしてそれを実行するためには、ここでこうして他の情報から遮断されている方がやりやすいのだ。

当然ながら、わたしに全員が分かるわけではない。そんなに全能ではないのだから。そのうちダンブルドアは周知するとは思いますが、被害を減らすためにいたずらな人殺しを生むような人間には見えないから。だから自分でやらねばならないのだ。

ああ、また一人。巨人の居住区でクルーシオ。けれどもそこには二十人ほどいて全てを終わらせることはわたしには出来ない。連鎖的に始まるオブスキュラスの暴走を、たった三人しか防げなかった。残る十七人が暴走し、逃げ惑う巨人どもを塵殺する。命からがら逃げ出す三人、あれはもしかや、マダム・マクシームか。

けれどもわたしはそれに声をかけることは出来ない。既に敵対した身で声をかけられるなどと思う方がおこがましい。だから、どうか、その哀れむような瞳をこちらに向けないで欲しい。ハグリッド？ あっちいけ。もう一人はもつと知らん。

「……ポーバトンで、待っています」

ポツリと呟かれた言葉なんて知らないったら知らないのだ。わたしに救いの手は必要ない。必要なのは贖罪。それだけだ。だからそんな美しい瞳をわたしに向けないで。

死喰い人達も学習した。複数人連れていけば不発には終わらないのだと。不良品ももろとも処分すれば良いだけなのだ。そうして在庫処分は派手になる。三人止められると思われれば五人連れられ、五人止められたなら十人連れ、十人止められてもそれ以上を連れ出された。

心が、心が、削れていく。分かっていたことだ。こうなるとは知らなかったとは言えるわけがない。被害者面なんてするわけがない。一人一人『わたし』を殺し、頻度は下がっても任務は続けられる。つま

りわたしはまだ最後の任務を果たせていない。あの人と繋がってなお。

アストリアがここに連れてこられてから、わたしは任務の時だけ連れ出されるようになった。彼女に変わったことがないか何度も何度も確かめた。不安に駆られてはいるようだが、おかしなことはされていないらしい。

ならば何のために彼女はここにいるのか。答えはマルフォイが教えてくれた。

「アストリア！」

「あつ……ドラコ様！」

ひしりとかたく抱き合う若き二人。どうやらどちらも思い合っているらしい。つまりは彼への人質ということか。いつしか『わたし』が擬装したメイドも来ることがなくなったことも考えれば、きつとルシウス・マルフォイは失敗した。

気が済むまで抱き合った後、マルフォイは尊大にわたしに依頼する。

「アレを、いくつかくれ。個人的にだ」

「……それ、は」

それは残酷な願いだった。優しい彼はそれをおぞましき生き物であると認識していたのに。そうするしかないほど追い詰められてしまったのだ。その手はアストリアの手に重ねられている。マルフォイは彼女を選んだのだ。どんな苦汁と罪を呑んでも彼女といることを選んだのだ。

かすれた声でわたしはマルフォイに確認する。

「何のためにですか？」

「闇の帝王の思し召しに従うためだ」

心は読み取れない。けれど、それでも。握り締められた手を、わたしは信じることにした。起き上がるのも億劫だけど、それでもゆつくり起き上がって。わたしは未来のために魔法をかけた。心がへし折れそうになる。

「——恩に着る」

「ごめんなさい、流石に、体力なくて……一度にたくさんなんて、無理で」

「いや、何度でも来るさ」

そこには覚悟を決めた男がいた。もう少年とは呼べない彼は二人の白い娘を連れていった。残されたわたし達は黙って身体を寄せ合った。こんなことしか出来ない自分が嫌になる。それでもわたしはやり遂げてみせる。それがきつと、わたしに出来る償いになるから。

イギリス魔法界は暗鬱な雰囲気にも包まれている。イギリス全土に広がるその霧は、誤魔化されているだけで全てが血の色をしていた。それはわたしの罪の証。『わたし』の命。わたしが奪った全ての命の証明だった。R・I・P。安らかに眠れ。しかしそれを言う権利はわたしにはない。

ドラコ・マルフォイはやり遂げるだろう。自身に課したその試練を、きつと見事にやり遂げるだろう。そのときに、気に病まなければ良いけれど。彼が望んだ死者ではない。それを望んだのはわたしだから。だからどうか、生き延びて。

あの後何度かマルフォイは来たけれど、そのうちふつつりと来なくなった。それをわたし達は黙っていた。彼が来なくなったから、わたしの任務はまたこの部屋で行われるようになってしまった。ここには仮にも純血の令嬢がいるのに、だ。情操教育に悪いとは思わないのか。

死喰い人どもは一応彼女にだけは手を出さなかったが、それもいつまで保つことか。おぞましい任務を彼女は軽蔑しきった目で見ていた。任務が始まれば部屋の隅へと退避した。それで、良かった。彼女に構ってあげられるだけの余裕はもうわたしには残されてはいないから。

そうしてある日、ベラトリックスがやって来た。

「あの、薬草代がもつたいないのでほどほどお願いします」

反射的にそう言えば、彼女は呆れたように返してくる。

「……そういう趣味があるんならやってやるけど、今日はそういうこ

とを言うんじゃない、良いね!」

もちろん答えはYesしかない。ベラトリックスのクルーシオは痛いだけでは済まないのだ。恐らくこの女は無意識にデイフィンドやら何やらを繰り返している。神経に響くだけでなく実際に拷問の痕が残るので実に面倒なのだ。ちよつとそういう趣味はないので止めていただきたいかった。もう切実に。

程なくしてヴォルデモートがやって来る。いつものように彼女が部屋の隅へと退避しようとして、ニタニタ笑うヴォルデモートは彼女を止めた。今日はいつもと趣向が違うらしい。本当に、わたしはくそつたれだ。

「そう逃げるな、不敬であろう」

「も、申し訳ございません、ご主人様……!」

か細い声は震えていて、いかにもいじめたくなる小動物のようにも思える風情。それに嗜虐的な笑みを浮かべたヴォルデモートは、彼女の服を引き裂いた。紛うことなき変態で、ロリコンだった。

彼女はあまりの羞恥に青ざめる。

「きゃっ?! なっ、何を……!」

それを尻目にベラトリックスも服を脱ぎ、わたしも任務が始まるのだと察して服を脱いだ。つまりはそういうことだ。今日もヴォルデモートとの任務が始まる。その相手が三人になるだけのことだ。拒否することなど許されてはいない。

嫌がる少女を無理矢理に。

「や……ドラコさま! ドラコさまあつ……!」

悲痛な叫びをスパイスに。

「我が君、どうかあたしにも」

恭しく跪く女性を従えて。

「さあ、誰が我が胤を孕むに相応しい女か示すが良い」

狂った宴が始まった。苦痛。苦痛。ベラトリックスはそれを快楽にきちんと変換し、わたしもまたそれを遅れて変換した。そうできないのは全く経験のない彼女だけ。泣き叫びすすり泣き憐れみを誘い全て無駄に終わり。苦痛だけを受け取り倒れ伏す。それを彼らは

笑っていた。

その日からずっと、その宴は続いていた。ヴォルデモートがいらない日には少しばかりの休息を取れるがそうでない日はずっとこれ。わたしが孕まないのだから彼女もそうだと信じていたが、裏切られた。数カ月もすればわたし以外は任務を果たし、わたしだけがそれを遂行できていない。

彼女は膨れるそこに絶望を隠せず泣き暮らす。死喰い人どもは二人を甲斐甲斐しく世話をする。そこに宿るは帝王の武器。そうであるからには何事も起きぬよう守るしかないのである。わたしに構う暇もなさそうで、やつと穏やかな日々を手に入れた。それが嬉しいことだとは思わないが。

闇祓いどもを殺すために『わたし』達は投入される。人数さえ揃えば何とかなるとでも言いたげに、ホグワーツの在庫は全てなくなつた。ヴォルデモートだけはその事に気付いていないし報告もされていない。ここで作った在庫もみるみる減っていることには気付いているだろうが。

やがて噂が聞こえてくる。下卑た死喰い人どもの言うことには、ドラコ・マルフォイは失敗した。父親と同じように失敗し、最早ここに戻ることにすら許されない。マルフォイの名誉は地に堕ちた。世間的にも、闇の陣営でも。彼女は憔悴しきって痩せ細り、栄養だけが吸い取られていく。

そして死喰い人どもは沸き立っていた。何故なら帝王の腹心セブルス・スネイプが、大いなる任務をやり遂げたらしいのだ。それはすなわち彼がダンブルドアを殺したことを意味していた——さもありません、わたしはそれを知っている。

事態は混迷を極めていく。そんな中で変わらないのはここだけだ。ここだけがいつもと変わらぬ煉獄なのだから。苦痛と快楽という炎の中で狭間で踊り狂うしかない煉獄だ。産み出されるものは罪しかない。

ある日いつものようにやってきたヴォルデモートが問うた。

「そういえば、ソーウェル。お前の父親は結局誰だったのだ？」

その問いに、わたしはしばし言葉を探した。けれども誤魔化す言葉はどこにもない。誤魔化す気力もどこにもない。既に死んだ人間を貶めることになりやしなければ良いと憂慮はしたが、答ええないという選択肢がもう選べない。知らないというには時間を取りすぎた。

「恐らく、で良ければお答えします」

「ほう、推測なのか。つまりは会ったことがないのだな？」

そう。わたしはスワンと名乗ってはいたものの、彼の血は継いでいない。彼の色をわたしは継いではいないから。スワンはわたしを救ってくれただけなのだ。黒い髪に灰色の瞳。そんな特徴を持っていて、母と関わりがあつた人間は二人だけ。そう、片方はあの忌々しいならず者どもの一員だ。

思案しヴォルデモートが答えを出す。

「となると、あのブラックの小僧か？」

「恐らく。シリウスではない方のブラックかと」

さもありませんとヴォルデモートは笑った。まあ当然か、前回の戦いの時にこの陣営で母を監禁させられていたのはシリウスではない方のブラック、つまりはレギュラス・ブラックだったのだ。彼が父親だと考えるのが妥当だろう。そしてそれは真実だ。

「なるほどな。誰もが蔑むお前はれっきとした純血の令嬢だったわけだ」

くつくつ、くつくつ、耳障りな声。別に血はどうだって構わない。今更何かを望むつもりはない。ブラックの血を継いでいたところで何かを得られるわけでもないのだから。所詮わたしはスリザリンのホムンクルス。魔法族だとは思われない。ペットが同じ人類ではないように。

戯れに彼はわたしに問うた。

「外に出たいとは思わないか？」

外に？ 今更？ この罪にまみれたわたしが出られると？ 本当には彼は思っているのか。いや、彼が正義となったなら、きっとあり得ない未来ではないのだろう。けれどもそれをわたしが赦せるかといわれるとそんなはずはない。

「……いえ、外に出て真っ当に生きられるような存在ではないことくらい、もう流石に理解していますから」

真っ当になぞ生きられるわけもなし。既にわたしは罪にまみれている。もう後戻りなど出来るはずもなく、するつもりもない。だからこの暗い部屋から出ようと思ったことはないのだ。他の誰もがこの部屋から追い出そうと望もうが、わたしはここにいる。他に場所はない。

救いのない暗闇の中を、苦痛を感じながら進むだけ。それがわたしに相応しい終わりだった。もう、どこにも、行けない。

致死の呪病

イギリス魔法界は最早無事な箇所を探す方が難しくなっていた。オブスキュラスの暴走によってもたらされる破壊は、魔法族の精神すらも壊しかかっていた。流石に闇祓い達もそろそろ学んだらしい。それに対処する方法が二つだけだと。どちらにせよ暴走するオブスキュリアルを救う方法はないのだと気付いてしまった。

一つ目の方法は簡単だ。一切の苦しみもなく死の呪文で殺してしまえば良い。量産型の『わたし』でさえあれば容姿も分かっているのだから、出会い次第エメラルドグリーンの閃光を叩き込んでやれば暴走させず死んでいく。そして二つ目の方法はあるにはあるが、とある人物の功績としてしか事例がない。ちなみにどちらもオブスキュリアルは救えない。

だから、魔法界には。殺伐とした空気が蔓延していた。たとえ敵の兵器だと分かっていたとしても、人間を殺すということは思いの外精神にダメージを受けるらしい。それに慣れてしまえば意図せぬ負荷がどこかにかかっていつか必ず痛い目を見る。

ダンブルドアが死んで、旗頭を失った彼らは英雄ハリー・ポッターにそれを求め。彼もまたそれに応じて躊躇うことなく『わたし』を殺していく。いつか彼にもしっぺ返しがかかるだろう。しかし意外なのはそこにいるはずの人間がいなかった。

ハリー・ポッターといえば隣にハーマイオニー・グレンジャーとロナルド・ウィーズリーがいるものだ。しかし、ロナルドとジニー・ウィーズリーはそこにいてもふわふわ茶髪の女性はいない。彼女は一体どこに行っただのか。

『わたし』の目を総動員して探す、探す。けれども気配は見当たらない。まさかマグル生まれだからと逃げさせられたのか。いや、いや――何百の意識を飛翔した末に最後の一人で引っ掛かった。何故そんなところにいるのだろうか。

「……酷い、仕掛けね」

ぼつりと呟くグレンジャーの隣には、ふざけて作った『わたし』べ

ラトリックスがいた。グレンジャーの瞳に映る『わたし』は正気ではなさそうだ。わたしの擬装は魔法ではないようで、グリーンゴツツの水も関係ないらしい。

悠々と金庫に侵入した彼女はうず高く積まれたガリオンを少々とその山の上にあつた妖しい金色のカップを手に入れて、そのまま不審がられることなく抜け出した。そこから遠く離れた森まで入り込み、死んだ瞳で呪文を唱えた。それはカップを叫ぶ魂ごと焼き尽くして消える。

「……ハリーの情報が正しければ、あとはレイブンクローの髪飾りとスリザリンのロケット、あともう一つ、か」

何の話かは分からない。変わり果てた、と形容するにはあまりにわたしは彼女に関わらなかつたけれど、これは流石にあんまりだ。憔悴しきつた彼女は窃盗までやらねば生きていけぬらしい。

と、そこでグレンジャーは大きいため息をつくと杖を振るつた。ぐにやりと視界が変わる。いつしかグレンジャーの瞳に映るのはベラトリックスではない誰かになっていた。そういえば彼女は、マルフォイから言われて作った『わたし』トックスとやらだ。七変化なんて出来るらしい。

「……貴女が知っていてくれたら楽だったのに。本当に誰なのよ、R・A・Bって……」

その言葉を聞いた瞬間、わたしは反射的に答えていた。
「——レギュラス・アークタルス・ブラック」

「……え？　ちよつ、ちよつと、今なんて……！」

「グレンジャー、ブラックの家に向かってください。そこにハウスエルフがいるはずですよ。あなたの助けになれるかもしれない」

それに信じられないものを見るような顔をしたグレンジャーは杖をこちらに向けた。当然だろう。服従させているはずの人間からそんな言葉が吐き出されれば反抗される可能性があるに等しいのだから。

しかしグレンジャーは容赦なく呪文を放ちはしなかった。少なくとも見た目では。

「答えて。貴女は……何なの？」

ぞろりと内側をなぞられる感覚。けれどもそれはわたしまでは届かない。

「あなた方が殺してきたもの。スリザリンのホムンクルス。いずれオブスキュリアルとして破壊をもたらすだろう道具です」

素直に答えたのは、偽る意味をもう見出だせなかったから。いつ誰にどのようなようにどうやってどんな理由で殺されてもわたしは何も言えない。言う必要もない。わたしが生んだ全ての娘達は死ななければならぬのだ。

目を細めたグレンジャーの手に力が入る。

「シヤノン・ソーウエル？」

「そう。そしてあなた方が知るシエイラ・スワンも同じです」

どうなるうがどうだつて構わない。けれど、彼女の言うR。

A・Bは。きつと母が死なせてしまった人だから。だから彼が誰であるのかくらいは語っておきたい。死ぬ前に。

「……さっきのレギュラスつて、確かシリウスの弟よね？　死喰い人の」

「そうですね。その血ゆえに前線に出ることは赦されなくて、シヤノン・ソーウエルの監視に当たっていた死喰い人です」

思考を巡らす。何かの真実を釣り上げようとしている。

「ねえ、スワン。貴女達に毒つて効くの？」

「いえ、呑んだことないんですけど……？　確実に殺したいならやっぱ死の呪文が一番手っ取り早いですよ？　苦しませたいなら磔の呪文も効きますが」

自身の弱点になりかねないことをぺらぺら話すがグレンジャーが知りたかったのはそこではないらしい。

「ソーウエルの姿は愛の魔法で……じゃああれは……まさか」

釣れた真実は、彼女にとつてもわたしにとつても実に意外なことだった。

「レギュラスがクリーチャーの代わりに使ったのはあの人とソーウエルとの娘だった？」

「……はい？」

意味が分からなかった。けれども断片だけは理解できてしまった。そういうことか。ヴォルデモートがあれだけわたしと頑張っても何も成せなかったのは、既に母と子を成していたからか。確かにわたし達は何人でも産めるけれども、流石に母の相手とはつがえない。ヴォルデモートが母と産んでいけば、わたしとは子を成せないのだ。わたしの子とはその限りではないが。

「そうよ、そうなんだわ……！ だから二人は生き延びたんだわ！」
「ちよつ、ちよつと待ってくださいグレンジャー、レギュラス・ブラツクは生きていますか？」

思わずそう問うが、敵かもしれない人間に情報をくれるわけがなかった。グレンジャーは『わたし』にインペリオ。服従の呪文を躊躇わないあたりがもう末期だ。魔法界の英雄の友人がこうなってしまうては、他の仲間の程度も知れる。

とりあえず黙ってグレンジャーに従って、ブラックの家らしきところへ潜入する。そこにいたのはクリーチャー。七変化などしなくとも、彼はすっかり『わたし』を見抜いていた。

「ああ……貴女は！ 貴女様は……！ どうしてそのような穢れた血と同行されているのですか！」

「クリーチャー、ごめんなさい。きつとわたしは貴女の知る『わたし』ではないと思う。でも……わたし達は、あの人の最期の願いを叶えに来たんです」

ぎくん、と身体を跳ねさせて。クリーチャーはそれを手に乗せた。
「これを……いえ、こんな危険なものをお嬢様にお渡しするわけにはいきません！」

「わたしなら破壊できます。クリーチャー、あの人はそのせいであなただに死んで欲しくないと思っっているんです。分かってくれますか？」

会話の通じない人間よりも遥かに与しやすい。ハウスエルフは主に逆らわない。そして、きつと、彼は。わたしのことをもそう思うよう彼に言っていると思うのだ。

震える手でそれをそつと『わたし』に手渡して、『わたし』はすぐにそれを燃やした。悪霊の火——見て覚えた、あまりよろしくない魔法。グレンジャーも使っていたもので、そしてヴォルデモートの分かれたれた魂をも焼き尽くせる魔法だ。

それを見届けクリーチャーの労を労って、グレンジャーとまた森の奥へと戻ってから。

「……っ、マーリンの髭よ、貴女服従の呪文も効かないの!？」

グレンジャーはそう叫んで頭をかきむしる。髪が痛むからやめた方が良くと思うのだが。

「慣れました。一体わたしがどれだけの頻度でそれに晒されていると思っらんです?。」

「……つまり! 私には貴女を信じるしかないってことね!？」

「信じたくなければここで死の呪文でも唱えて無害化しておきますが」

「極端すぎるわよ、それ……」

時間だけがちくたく過ぎる。グレンジャーが考え込んでいる。理論立てて自分を納得させたいのか、それとも反論を探しているのか。んーんーうなりながら考え込む様はとてもじゃないが先程までの荒みようとは似つかわしい。

そしてしばらく考え込んだグレンジャーは結論を出した。

「信じるわ。知恵を貸して頂戴、シェイラ」

「はあ……あなたがそう言うのなら、グレンジャー。けれど、条件はつけさせてください」

ハシバミの視線がそれを促してくる。それはもう魂にまで染み付いた願い。最早呪いともいうべき呪縛をわたしはグレンジャーに伝えた。

「最後には、わたしを。終わらせてくれると約束してくれますか? 殺して欲しいというわけではないんです。それは自分でやるので、せめて邪魔しないで欲しいんです」

その答えを聞く前に、わたしは意識を屋敷へと戻さなくてはならなかった。何故なら激烈な痛みに襲われたからだ。この痛さはベラト

リックスだろう。

「さつさと起きな！」

「おはようございます」

傷だらけだ。また教授に治してもらえるだろうか。それとももう見放されてしまっただろうか。分からない。ベラトリックスはわたしを連れて地下牢へ。何とそこには決死の表情を浮かべたルーナがいた。

「シェイラー！」

「よおく見ておけよ、ガキ。お前の覚悟っていうのはこういうことをされても逆らわない覚悟だぞ」

ニタニタ笑う死喰い人。ベラトリックスは鼻を鳴らし、慌てて他の死喰い人達に地上に戻されている。母体に障ると思われたらしい。それはそれとして彼らはわたしの着ているように意味のない服を引き裂いた。露になる傷だらけの身体。

「……流石に悪趣味では？」

「良いだろ？ お前以外とやれることなんてないんだからさあ」

視線の先には小鬼がいて、見知らぬ男性もいる。姿くらましなどは出来ないようだ。けれど、ならば、わたしがすべきことは。死んで欲しいとまでは思わない彼女らを、死んでも別に構わない奴らから救わねば。

何百回と使い慣れたその呪文を、わたしは躊躇うことなどしなかった。

「アバダ・ケダブラ、息絶えよ」

エメラルドグリーンが瞬いて、わたしに触れた男が死んだ。硬直する他の男達。続いて唱えて息絶えよ、息絶えよ。死ね、消えてしまえ、この世にお前達がいるよりは、彼女らが生き延びる方がまだましだ。

「何で……」

「さあ」

死んだ男から鍵を奪って牢を開け、囚われ人を外に出す。するとルーナがわたしの手までつかんでぱちりと姿くらましをした。着いた先はホグワーツの前。何故ここに彼女は連れてきたのだろうか。

とん、と背中を押されて。一歩近付いたそこには――

「……ダフネ？」

信じられないものを見るような顔をしたダフネがそこにいた。杖が振るわれ視界の下が色づいて。そういえば服を着ていなかったな、などと場違いなことを考える。痛みが癒えて、張り付いた血と汗とそうでない何か清められて。

そうしてようやく彼女は口を開いた。

「……生きてて、良かった……っ」

――衝撃だった。イギリス中の誰もがわたしの死を願っているものだと信じてやまなかったからだ。そんなことを言われるだなんて思いもしなかった。それも、わたしはアストリアとドラコにとてもとても悪いことをしたのに。

堪えるように歯が鳴っていて、心配をかけたのだとは何となく分かる。でも、それでも、だけど。わたしは良かったなどは思えない。わたしはわたしの産み出したものでどれ程の殺戮を繰り返したかもう記憶できないほどに罪にまみれてしまっている。

「ダフネ、わたしは……」

「何も言わないで……ここにいて」

出来るわけがなかった。それは、きつとわたしをダメにする。決定的に、全てを壊してしまう。だからわたしはダフネから離れた。信じられないものを見るような顔をしたダフネは目に涙を浮かべている。

「どうして……？」

「ごめんなさい」

こういう時でさえ言葉がうまく見つからない。見様見真似で姿くらし。激痛。何かを置き忘れたらしいが構うものか。手はある、足はある。動ける、戦える――殺せる。なら、それで構わない。

いつしかホグワーツには死喰い人どもが攻め込んできていて、何人もの『わたし』で強引に結界を破壊しようとしていて。わたしはそれを利用して、死喰い人どもを鏖殺せしめた。溢れ出すオブスキュラスを死喰い人どもに向けて。死体、死体、死体の群れ。生き残ったものはほとんどいない。

ただしそれを代償に、ホグワーツの結界をも破壊してしまった。ヴォルデモートは心を壊して容貌も分からぬほど顔をかきむしった無惨な少女と見目麗しき黒髪赤目の幼女を従えて。足元には蛇が従って。悠々と宣言してみせた。

「ハリー・ポッターを差し出すが良い。そうすればホグワーツには手を出さんと誓ってやろう」

響き渡る声。しかしポッターは出てこない。今出ていけば無駄死にするかもしれないが、他の誰をも救えるやも知れないのに。彼は、彼らは、この恐ろしい闇の魔法使いと戦うと誓ったのだ。

全身全霊で生徒達が、教師達がヴォルデモートに挑む。それらは幼女の杖の一振でなぎ払われて、戦う力のない生徒達は後方へ。それを狙って蛇が地面を滑っていく。

たった一人の幼女に生徒も教師もかかりきり。ポッターは出てこない。無駄に人が死んでいく。指を啜えてみているだけなど赦されるものか。わたしはその場から飛び出した。

目の前に現れる憎きならず者ども。ネズミと狼と犬がそこにいる。少しやつれたベラトリックスも遅れて現れて、全員が全員杖を向けあつて。

「アバダ・ケダブラー！」

先陣を切ったのはベラトリックス。その呪文が向けられたのはシリウスで、彼はそれを瓦礫を盾にいなして叫んだ。

「このっ、ワームテール！ 戻ってこい！」

「むっ、無理に決まってるだろう!? どれだけ僕が殺したと思ってるんだ、パッドフッド！ 僕がグリフィンドールなんて、やっぱり間違いだっただよお！」

「今ここで生きているんだ、ワームテール！ 死喰い人の中にいながらあの惨劇を生き延びたんだ、君は充分グリフィンドールじゃないか！」

身内同士の殺し合い。あちらではポッターとヴォルデモートの決闘が始まっていて、そちらでは蛇と少女と教師達が、更に奥では幼女が教授と戦っていた。

わたしはそんな中で——悪夢を見ているようだった。決意を秘めたその美しい瞳に縛られてしまう。ならず者どもの目の前に立ちふさがる美しい人が。ダフネが、そこに、いた。

「ダフネ……逃げてください」

「貴女が来てくれるならね、シエイラ」

「無理です。わたしは……人を、殺しすぎました。ここでヴォルデモートもろとも滅ぶべきです。誰も赦してなんてくれないし、わたしはそれを望んでない……！」

杖を、向けあつた。わたしは今からヴォルデモートを殺しきるために動きたい。ダフネは何故だか全く分からないけれど、わたしを止めたい。双方の欲望がぶつかり合う。唐突に飛んでくる女を利用して、ダフネの視界から消えたわたしは一気に少女の後ろへ姿現し。

「ミス・スワン！」

「アバダ・ケダブラ、息絶えよ！」

蛇が邪魔をして一撃では仕留めきれなかったようで、瓦礫を撒き散らしながら少女は身を翻す。蛇が襲い掛かってくるが、躊躇わなかった筋肉質の少年が剣で止めを刺していた。

「スワン、君は……」

「誰だか知りませんが、早く退避しなさい。ヴォルデモートとポッターの巻き添えになりたくないならね」

「ええ……誰か知らないって、それはちよつと酷くない？ ダンスパーティー、一緒に行つたじゃないか」

は？ ちよつと心当たりが……いや待て、擦りきれた記憶の遙か遠くに、そういえばそんな顔があつたような気がしないでもない。けれども今はそんなことを言っている場合でもないのだ。いつ流れ呪文が飛んでくるかも分からない中、悠長に話している時間が惜しい。

「覚えていませんね。それより先生方、早く皆さんを避難させた方が良いかと」

「……避難するなら貴女もですよ、ミス・スワン。貴女も大切なホグワーツの生徒ですから」

誰だったかももう忘れてしまった厳格そうな老女はそう言うが、生憎

わたしはもう避難などということを考える権利すら残されてはいない。死なねばならない。死なねばならない。死なねばならないのだ。だってそうしなければ、何人の屍の上で生きなくてはならないのだ？ 無言のままに姿くらまし。老女は消えて、わたしは次に幼女に襲い掛かる。失神呪文が無言のままに飛んできて、それを猫から老女に変わった先生が撃ち落とす。

「えっ……」

「セブルス！ この頑固娘を何としてでも止めますよ！」

「へっ!？」

途端に攻撃が三人分になった。幼女に教授と先生だ。何故そこが共闘し合うのかわたしには分からない。けれども、それでも、ここで殺すべきは一人だけ。黒髪赤目の幼女である。先ほどの少女。『わたし』アストリアの娘。名前は――

「今だけは共闘してやる、アンタレス！」

「助かりますわ、おじ様！」

「いや、何でそうなるんです!？」

突っ込みどころは満載。けれどもどうすることも出来やしない。三人分の呪文に圧倒されそうで、何とかその場を脱出する。

けれども、ああ、わたしは失敗してしまった。姿現しをした先でそれを悟る。倒れ伏すルーピン。鬼のような形相で転がっているシリウス。何故か義手のようなもので首を絞められているペティグリュウ。こいつらだけは、生かしていつまでも苦しんでもらいたかったのに。

高笑いするベラトリックスに杖を突きつけ短く告げる。

「アバダ・ケダブラ、息絶えよ」

ついでにエバネスコでペティグリュウの銀の腕は消してやる。これは慈悲でも何でも無い。ただの感傷だ。ギリギリ彼は死なずに済んだようで、呆然としてわたしを見つめている。

「何で……」

「ブラックにも言いしましたが。生きて苦しんでください。母を壊したあなた達をわたしは決して赦さない。けれど、この手で仇を討つなん

て意味がないことはしません。生きて、苦しんでください」

そこで幼女に教授と先生だ。姿くらましで逃走しようとするれば、今度はダフネに追い付かれた。

「何で逃げるの！…このっ……このっ、弱虫！」

ああ、泣かせてしまった。けれどもこれだけは譲れない。

「弱虫結構。わたしは、死ななければなりません。ダフネ、わたしは赦されてはならないんです。誰にも赦されるわけがない。ヴォルデモートに利用されたのは事実でしょう。けれども、だけど、現状に甘んじたのはわたしです。わたしが、全部、悪いんです。だから、死ななくては」

それに全方向から怒鳴り声が返された。

「やった奴が悪いに決まってるでしょ！ バカなの!?!」

「あの暴走を自発的にやったというのならそう言うのも構わんがね、スワン。君にそんな度胸があったとは思えませんな？」

「悪人がペティグリューを助けようとはしますか！ 貴女のようなお人好しに全ての責任を負わせるような人間こそ裁かれるべきです！」

「だからといって私を殺そうとしなくても良いでしょう!?! 私だって死にたくありませんわ！」

「お母様の言う通りですわ、馬鹿なんですのねお婆様！」

沈黙。流れ呪文が飛んでいく。

「……………え？」

今なんと言った、『わたし』アストリアの娘？ 聞き間違いでさえなければ彼女は『お婆様』などと宣わなかっただろうか。確かに間違いではないのだが、いや、流石にそれは……何かちよつと嫌かもしれない。いや、うん、そのくらい産んではいるけれどもだ。考えてはならないことを考えようとしてしまった。だって娘を産めるのはソーウエルだけなのだから。

そしてその停滞が全てを決した。人一人を失神させるにはオーバーすぎる五本の失神呪文をわたしは避けられない。倒れ伏し、拘束されて全てが終わるのを見ていることすら出来なかった。ただ終わって、ヴォルデモートが死んでポッターが生き残るのをあとで知っ

ただけ。

わたしは、死ななければならぬと思っていたのに。出来なかつた。どうしても、出来なかつた。

安寧の至宝

ゆるり、とカーテンが揺れる。真っ白いカーテン。誰かは確か薄いピンク色をしたカーテンだと言っていたけれど、残念ながら色を失って久しいわたしの視界に映るのは白黒の世界だけだった。真っ白いベッドの上で上体を起こし、窓の外を眺める。

いつそこのまま誰かが現れて魔法でも放ってくれやしないだろうか。もちろんそんな都合の良い救いは現れはしないのだけれども。いつまでもわたしはこの白い病室に囚われていた。今までも、これからも、きつと死ぬまで。

それでも良いか、と思えるようになったのは本当に最近になってからだ。時間の感覚などやはり失って久しいものだけれども。前はずっともがいて苦しんでいたような気がする。今すぐこの命を終わらせなければわたしはわたしを赦せなかった。そうだったはずだ。

ホグワーツでの戦いが終わってすぐに、わたしはこの病室に監禁された。当然だろう。いつ暴走するかすら分からない危険なオブスキュリアルを野放しにする理由がどこにも見つからない。すぐに杖を奪って自分にアバダ・ケダブラしようとするわたしを皆が拘束し、何度も説得された。

それでもわたしは諦められず、どこかに残っているだろう『わたし』を探した。けれど顔を潰した少女はもうわたしには従わず、七変化の女性はある戦いで暴走していて、黒髪赤目の少女は『わたし』ですらなかった。そして他は残されてすらいなかった。わたしは楽に死ぬ手段を失った。

首をくくつてみた。舌を噛んでみた。手首を切り裂いてみた。首を掻き切つてみた。窓から飛び降りてみた。窓ガラスで心臓を抉り出そうとしてみた。ありとあらゆる方法を試したが死ぬ前に必ず止められてしまった。わたしは苦しんで死ぬ手段すら失った。

もがいても、あがいても、誰もわたしを死なせてくれない。殺してくれない。罰してくれない。責めてくれない。傷付けてくれない。犯してくれない。痛め付けてくれない。苦しめてくれない。わたし

は苦しめられる権利すら失った。

わたしに一体何を求めているのだろう。大切な名前ももう焼き切れてしまった。大切な人がいた気がする。守りたかったものがあつた気がする。けれどもわたしは大勢の人を殺した。負の感情を暴走させ、オブスキュラスを大いに解き放つて快感を得てすらいたはずだ。それをどうして誰も問わないのだろう。わたしは大切な人の名を失った。

ああ、今日も一人。ベッドの隣に金色の髪がなびく。

「シェイラ……」

泣いている。そのうつくしい月桂樹のような瞳からはらはらと涙がこぼれ落ちていく。真珠でも見ているかのような気分だ。よく知っている人のはずなのに。わたしはぴくりとも動けない。慰めることすら出来やしない。わたしがどう動いても傷付けることしか出来ない。知っている。

氷のように硬直した身体。動かそうと思っても口は一切開かない。喉が震えることもない。音が発されることもない。ただか細く呼吸だけが規則正しく続いていて、わたしを生かしてしまっている。わたしは自身の身体にさえ裏切られている。自立行動すらわたしは出来なくなってしまう。

ひとしきり泣いた月桂樹の女性はわたしを抱き締めて、そして「また来るわ」と言い残して去っていった。もう来ないで、と言えるほどに声が出れば良かったのに、わたしはそれすらも出来なくなってしまう。わたしはどこにも行けない。動けない。

どれくらい時間が経ったのか。朝かもしれないし昼かもしれない。はたまた夜なのかもしれないし深夜なのかもしれない。常に明かりの灯ったこの部屋でそれを知ることが出来そうにない。知れるほどに感覚が鋭いわけでもない。

銀髪の青年が黒い髪の女性と赤子を連れてきたこともある。多分。色が分からないから推測でしかないけれど。青年は痛ましい顔でわたしを見てそれっきり。いつか伝えたかった言葉はもう白にとけて消えた。赤子は命に満ちていて、わたしの手を振り払って泣いた。月

桂樹の瞳からぽろりと涙がこぼれる。わたしにはその涙を拭ってやる権利すらない。

皆が入れ替わり立ち替わりするけれど、わたしは誰にも何も言えなくて。殺してと泣くことすら出来なくて。心ばかりが死んでいく。わたしは死ねば楽になれるのに。もう痛くもなりたくなくなってしまうから、死んでしまいたいのに。

やがて人が減って、機械的にわたしを生かす看護師がいるだけになって。皆が痛みを忘れていく。わたしもまたそれは例外ではない。あれほどまでに鮮明に焼き付けたはずの死体の群れがもう遠い。あれに償わなくてはならないのに。赦されてはならないのに。死ななくては償えないのに。死ねない。

強制的に栄養を取らされる。生かされる。何故。死なせて。暴走したくない。誰ももう殺したくない。どうか、どうか、お願いだから死なせて――

「君のそれは逃げだよ、スワン」

「ムーニー……」

「僕らは逃げない。だから、君も逃げずに向き合うんだ」

いつの間にかいた擦りきれた男はそう言って、看護師に絶対にわたしを死なせるなど懇願していた。どうして。わたしは赦されるべきではない。逃げずに向き合うんだ、なんていわれても何と向き合うべきかすらもう分からない。

「貴女が向き合うべきはその罪ではありませんよ。貴女自身です」

老女がそう言つて、消えていく。わたし？ わたしに向き合うべき？ 意味がやっぱり分からない。向き合うべきわたしなんてどこにもいない。だって、そんなものは最初から存在していないから。

やがて誰もがわたしを忘れていく。その穢らわしい罪だけを残して。

「分かります。貴女は死にたいと思っている。皆身勝手なことばかり押し付けていく……けれど、もう赦されても構わないのですよ」

「……あたし達は進みます。どうか、幸せになって、お婆様」

ああ。どうか、幸せになって。心が抉り取られていく。あなた達が

幸せになることをわたしは心から望んでいる。けれどわたしは救われるべき人間ではない。人間ですらない。ただの道具なのだから、幸せになる権利すらない。

あの日のあの地下室で、わたしは死んでいるべきだったのだ。そうすればこんなにも誰かを殺さなくて済んだのに。とぐるを巻いた黒い感情がぐるぐるぐるぐる渦巻いていく。けれどもわたしはそれ意思で押さえつけ、縛り上げてまた身体の中へと導いた。

「ロルフ、出来る？」

「出来るわけないだろ、ルーナ……これは、僕らの手に負えるようなものじゃない。お祖父様にだって無理さ……」

誰かの声が聞こえる。けれども彼らもまたわたしに何もしてくれない。出来ないと言われたのは初めてだ。どうか生きてと、死ぬなと、幸せになれと身勝手に願っていく中で。彼らだけははつきりと出来ない、無理だと言ってくれた。

ああ、どうして。それでも彼らは何もせずに消えていくのか。またわたしはこの白い牢獄でひとり。何も出来ず祈り届かぬままに。どうか。どうか——どうか。

しばらくまた時間が経って、不意に枷が外された。反射的に杖を取ろうとしたが、異様に身体が重い。寒い。この感覚はどこかで覚えていた。けれどもそれがいつのことだったのか、あるいは本当にあったことですらないのか。わたしには分からない。

目の前に黒い塊が。希望が奪い去られていく。そうしてそれと同じになれると思ったのに、何故かそいつはガラガラとわたしの魂を吸い上げるのをやめてしまった。むしろ吐き出した。何故だ。そこまです望が欲しくなかったのか。

そこに女性が飛び込んできて、叫んだ。

「エクスペクト・パトロナム！ 守護霊よ来たれ！」

何だろう。この懐かしい暖かさは。けれども見たことのないこの光景は。白銀の猫がそれを追い払っていく。それを尻目に抱き付く柔らかな感触。髪の毛の長い女性。ああ、これは——

「……だ、ふね……？」

久しく仕事をした声帯が割けかけて血の味が——ああ、味がする。目の前で鮮やかに色づいたダフネは随分大きくなっていて、もう立派なうつくしい大人の女性だった。

「シエイラ……シエイラー！」

反射的にエピスキー。加減はなんとか調整した。久しぶりの感覚。ああ、わたしは……どうしてこうも穢いのか。包まれている暖かな身体が嬉しいだなんて。どうかしている。だのにわたしはそれを振り払うことすら出来ないのだ。

「どうして……」

「聞いて、シエイラ。判決が出たわ。全部決まった。誰も貴女を罰することはもう出来ない。身元は私が引き受けた。だから……だから、一緒に行きましょう」

どこへ？　なんて聞かなくなつて構わない。だつてわたしに行くつもりがないから。わたしはどこにも行けない。もうそんな体力は残っていない。限界を超えて孕み続けた代償は、極端なまでの衰弱だ。そのまま死なせて欲しかったのに、どうして皆は生きろというのか。

ほら、この一歩すらも。ぐらりと視界が揺れてへたりこむ。

「シエイラー！」

「……っ、ふう……っ」

生きたくない。けれどきつと、ここにいては止められるから。だからわたしは姿くらまし。もう痛みなんて感じられない。暗い、あの地下室へ。久しぶりの色の暴力が目を痛め付けてくる。あの時のまま、何も変わっていない。

「……っ、たて、ない……」

ずっと使われなかった足はもう役目を果たしていなかった。仕方なく近くの絨毯にウインガーディアム・レヴィオーサ。ふわふわ漂いわたしはその真ん中へとやっと帰ってきた。ここがわたしの終着点だ。

蹲って、転がって、そして。目蓋が自然と降りてくる。どうか閃いて、あの時のように。

「死ね、化け物め！ お前さえ、お前さえ産まれてこなければ良かったのに！ アバダ・ケダブラ——」

「やめなさい！ そんなことをしたって貴方の家族が帰ってくる事なんてないんだから——！」

ダメだ。そこにダフネがいたら、そんなのは、そんなのは——！
奇跡のようにわたしの身体はそこに滑り込んだ。

「それで、お母様。その人はどうなったの？」

「さあ、どうなったのかしらね。ほら、お話はおしまいよ。早く準備なさいな」

「はあ」

ある夏の日、金色の少年が駆けていく。愛しい息子。大人になつてそれなりの相手と結ばれて。そして産んだ子だ。酷く優秀で手も焼かされなくてまるで理想の息子のようだった。裏で少しやんちゃをしていることくらいは知っているが。

ああ、今日も、泣き声が聞こえる。生前であればほとんど聞かなかったその声はいつだって耳元で囁いている。救えなかった。贖罪が出来なかった。どうしてどうしてどうすれば良かったの。そんなことで泣く必要はないのに。

本当にあの子は頑固だった。

「お母様ーっ、行きましょう！ ダイアゴン横丁へ！」

「ちよっ、気が早いわよ！ もう……」

煙突飛行粉ですぐにダイアゴン横丁へ。横丁は今日も賑わっていた。あの痛ましい戦争なんてなかったかのよう。代わりにもう見慣れてしまった銀色の光が静かにそれを見守っている。危険なことが起きたらすぐに対処できるように。

あれからすぐにイギリス魔法界に現れたこの銀色の光を、魔法省はすぐに調査した。ニユート・スキヤマンダーをはじめとする魔法動物学者にも依頼が飛んだ。徹底的な実験が始まった。けれどもすぐにそれが魔法族にとって危険なものでないことが分かった。

何も危害を加えることがなかったのだ。どんな実験にも素直に従

うという時点で色々疑うべきだとは思うのだが、とにかく何をやられても従順だった。動きを見せるのは誰かが危険な目に遭いそうな時だけ。そんなときだけそれはふわりと飛んで庇うような動きを見せる。

特に、死の呪文に対する抵抗力は凄まじいことになっていた。全く原理の分からぬことに、当たると何故が増えるのである。光の方だ。誰もがその近くで暮らしていさえすれば死の呪文に怯えなくても良くなったのだ。もうおいそれと唱えるような輩はイギリスには残されていなかったのだが。

とにかく無害だということ、その光は放置されることになった。そして新種の魔法動物として登録された。命名したのはニュートの孫ロルフの妻となったルーナであったという。

ずっと、その光はダフネを見守ってくれていた。そしてダフネにだけ聞かせてくれた。その悔いる声を。嘆きを。聞きたくないとは思わない。二度と聞けない真の友の声を聞けるのは、この時しかないのだから。

「お母様、僕……ちゃんとホグワーツに行けるでしょうか。寮に入れるでしょうか」

「大丈夫よ。どんな寮に入っても、私は貴女を愛しているわ」

息子を抱き締め、銀色の光に触れる。戸惑ったように揺れるそれに慈しむように触れ、その手を息子の手に触れさせた。後ろは見えない。先に進まねばならない。振り返ることは、出来ないから。

光はいつか消えるだろう。けれどそれはきつと、誰かの救いの導となるだろう。スリザリンのつがいなどではなく——名もなき人達への救いとなるだろう。